

世界農産物市場の形成

持 田 恵 三

- 一 はじめに——世界貿易における農産物
- 二 交通革命と農産物市場の拡大
- 三 世界農産物貿易の発展
- 四 世界農産物市場の地域構造
- 五 多角的貿易体制と農産物貿易
- 六 おわりに

一 はじめに——世界貿易における農産物

一九世紀七〇年代後半と第一次大戦前の世界貿易の構造は第一表の通りである。この二時点の貿易構造は殆ど変化がない。第一次産品が六二・六四%を占め、工業製品が三六・三八%を占めていた。工業製品の殆どすべては工業国から輸出されていたが、第一次産品の輸出は工業国と農産国がほぼ半分であった。そして工業国の工業製品と農産国の第一次産品の交換は、世界貿易の二〇%前後を占めていたが、工業国間の第一次産品と工業製品の交換、第一次産品どうし、工業製品どうしの交換も大きなシェアを占めていたのである。

当時の第一次産品の大部分は農産物であった。第二表にみるように一九一三年では第一次産品の八五%が食糧と原料農産物であった。だから第一次産品についていったことは、農産物についてもあてはまるのである。一九一三年五〇%を占めた貿易商品における農産物は、それ以後現在に至るまでその比重を低下し続けていることは同表の

第1表 世界貿易の構造

(単位: %)

	1876~1880			1913		
	第1次産品	工業製品	計	第1次産品	工業製品	計
工業国間	29(47)	16(43)	46(45)	27(42)	16(45)	43(43)
工業国→農業国	5(8)	21(54)	26(26)	5(9)	17(47)	23(24)
農業国→工業国	23(38)	1(2)	24(25)	27(42)	2(5)	29(28)
農業国間	4(7)	0(1)	5(4)	5(7)	1(3)	6(5)
計	62(100)	38(100)	100(100)	64(100)	36(100)	100(100)

注. 工業国 (Industrial Countries) とはアメリカ, イギリス, ベルギー, フランス, ドイツ, オーストリー, ハンガリー, オランダ, イタリア, スウェーデン, スイス, 日本であり, 農業国 (Non-industrial Countries) はその他諸国. P. L. Yates, *Forty Years of Foreign Trade*, 1959, pp. 57-59 による. 全貿易額を100とした比重は Yates の示した各産品別のタイプ別比率 (カッコ内の数字) にもとづいて, 各産品総輸出量から各欄の数字を逆算して再計算したものである. しかし品目計の数字は Yates の示したものと一致しないので, その比率もまた若干のズレがあることは表示の通りである. また1913年については品目の合計がそもそも Yates の示した計と一致していないので, その総計は逆算した数字の計を使用した.

第2表 世界貿易の商品別構成 (輸出, f. o. b.)

	1913	1929	1937	1953	1963	1970
総輸出(億ドル)	191	324	252	715	1,543	3,125
総輸出 (%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
第1次産品計	58.7	56.6	57.0	52.5	42.3	33.2
うち食糧	29.0	26.1	24.8	23.3	19.5	14.8
原料農産物	21.1	20.0	19.5	16.3	9.4	5.9
燃料	4.8	6.3	7.5	10.4	10.2	9.2
鉱石類	1.3	1.8	2.8	2.5	3.2	3.3
工業製品計	41.3	43.4	43.1	45.2	55.9	64.4
金属類	8.4	8.5	10.5	—	8.0	9.3
機械類	4.0	5.8	6.4	—	20.4	23.6
化学品	3.6	3.0	3.9	—	6.1	7.1
繊維品	13.1	12.0	8.8	—	6.0	5.9

注. 1913, 1929, 1937年は P. L. Yates, *op. cit.*, pp. 222-3. 1953, 1963, 1970年は GATT, *International Trade*, 1959, pp. 80-81: *ibid.*, 1970, pp. 22-23.

第3表 世界貿易輸出量指数（第1次大戦前）
（単位：％）

	1876～1880	1896～1900	1913
全輸出	30	54	100
工業製品	32	48	100
第1次産品	31	60	100
うち食糧	33	—	100

注. 食糧の1876～1880年は1876年のみをとる。P.
L. Yates, *op. cit.*, pp. 30, 39, 62 による。

示す通りである。一九七〇年のそれは二〇％強になってしまった。その代わりに工業製品と鉱産原料（ことに石油）がシェアを拡大している。

一九世紀の第四・四半期と第一次大戦までの二〇世紀は、このようにみると以後今日までの世界貿易において、農産物がもつとも大きな役割を占めた時期だったのである。しかもこの約四〇年間に第一次産品＝農産物のシェアは、それ以後と違って殆ど変わらなかった。それはその輸出額が他の商品と殆ど変わらずに伸びたからである。一九世紀の第四・四半期においては、第一次産品輸出量の伸びは、むしろ工業製品の伸びをしのいでいた（第三表）。輸出単価においても、第一次産品と工業製品において、この間の変化率の差は殆どなかった。⁽¹⁾

もつともこれ以前の時期の世界貿易において、農産物がより重要な位置を占めていたことは間違いない。近代以前の産業構造が農業中心であったこと、従って商品そのものに農産物が多かったことを別としても、もっぱら特産物貿易として行われた世界商業において、気候、風土の特殊性に依存する各地の農産物が多くを占めていたことは当然であった。とくに輸送手段の未発達な時代には、遠隔地間の商業にのりうる商品は、運賃負担力の高い奢侈品に限られた。こしようをはじめとする東洋の香料は、古代以来の東西貿易の花形であった。東洋の絹、綿織物、ヨーロッパの毛織物も、農産加工品ではあるが、特産物として重要な貿易商品であった。一七世紀になっても香料は貿易の中心であり、一八世紀になっても

らは砂糖やタバコが重要になった。⁽²⁾

イギリスの一八世紀の輸入は大部分、熱帯や東洋の産品や原料であった。一八世紀初頭の輸入の主力は、当時「雑貨」と呼ばれた砂糖、茶、香料であったが、一八世紀末になってもこの雑貨は依然として第一位を占めていた。この他の輸入品は穀物、原綿、リンネル、インドの反物、亜麻、麻、染料原料等であり、輸出品は毛織物を主としていた。⁽³⁾

この農産物を中心とする特産物貿易の変化は、産業革命によってもたらされた。生産力の急速な発展と共に、貿易量もまた急速に増大した。大凡の見積りによれば、世界貿易は一八〇〇年の二億八千万ポンドから一八三〇年に三億八千万ポンドに、一八五〇年に八億ポンドになった。この貿易の拡大は生活必需品が貿易商品の主力となったことを意味していた。一八世紀末の第一の輸入品は砂糖であったが、一八五〇年には小麦と原綿が二大輸入品目となった。⁽⁴⁾

必需品が貿易商品の主力になるには二つのプロセスがある。一つは旧来奢侈品であったものが、生活水準の上昇に伴って必需品となる場合である。砂糖、茶がその例であった。もう一つの場合は旧来からの必需品が貿易商品となる場合である。穀物、繊維品、畜産物等である。これまでもつぱらそれぞれの地域で自給自足されていた必需品も、一八世紀にもなると次第に貿易にのり始める。バルチック海南岸諸国は古くからの穀物輸出国であり、イギリスも一八世紀の最後の四半期までは、穀物の輸出を行っていた。しかしこのような同一の気候条件をもった地域間の農産物貿易は、主として一時的な不足をうめるためのもので、しかも近距離の場合に限られていた。衣料品の場合も同様であった。⁽⁵⁾

奢侈品・特産物貿易の必需品貿易への転換は、資本主義的貿易の確立を意味していた。つまり資本主義的国際分業の成立である。この国際分業はリカードが比較生産費説のモデルにおいて例示したように、既存の産業部門の再編成による特化だけを意味するのではない。むしろ資本主義はその必要に応じて、新しい特産物輸出地を作り出していった。東洋の特産物たる綿花の主産地は、移植された西インド、新大陸へと移り、小麦もまた新大陸に新しい生産地を見出した。しかしこの農産物をめぐる国際分業、つまり農産物貿易が、より本格的な展開をとげるためには、産業革命だけではなく、それに引き続く交通革命を必要としたのである。

一九世紀の第四・四半期は、まさにこの交通革命の時代であり、それによって世界貿易の巨大な発展、とくに農産物貿易の全世界的な展開が行われた時代であった。この時代を通じて、現在に至る世界農産物市場の原型は形成され、世界農業の再編成が真に世界的な規模で行われたのであった。前述したように当時の世界貿易に占める農産物の比重の大きさからして、これは同時に世界市場の本格的形成をも意味していた。本稿はこの一九世紀の終わりの三分の一から第一次大戦までの、世界農産物市場の形成過程と、その市場構造を明らかにしようというものである。

注(1) League of Nations, *Industrialization and Foreign Trade*, 1945, p. 157.

(2) J. B. Condliffe, *The Commerce of Nations*, 1951, p. 290.

(3) T. S. Ashton, *An Economic History of England, The 18th Century*, 1955, p. 154.

(4) W. Ashworth, *A Short History of the International Economy, 1850-1950*, 1952, p. 30. 尾上・行沢訳『国際経済史』二二頁。

(5) *ibid.*, p. 29 邦訳、二〇頁。

第4表 アメリカの農産物輸出 (1867~1901年)

	小 麦	とうもろこし	牛肉・同品加工	豚肉・同品加工	綿 花	タバコ
	—百万ブッシェル—		—百万ポンド—			
1867~1871	35	10	55	128	902	195
1872~1876	66	39	115	568	1,249	242
1877~1881	133	88	219	1,076	1,739	266
1887~1891	116	55	412	936	2,440	259
1897~1901	171	193	637	1,528	3,448	304

注. 小麦, とうもろこしには小麦粉, とうもろこし粉を含む. E. C. Nourse, *American Agriculture and the European Market*, 1924, p. 25.

二 交通革命と農産物市場の拡大

一八六〇年代の世界はまず南北戦争(一八六一~六五年)によって衝撃を受けた。南部の農産物とくに綿花の輸出は急減し、綿花飢饉に工業世界を陥れた。インド、エジプト等の綿花生産は急速に拡大され、増産された綿花はヨーロッパへと引き出された。一方南部市場を閉ざされた西部、北部の食糧は、その吐け口をヨーロッパ市場に求めた。折から一八六〇~六二年はイギリスの穀物は不作であり大きな需要が生まれたのである。ロシア、ドイツからの輸出は、この急増した需要に対応出来ず、アメリカの小麦だけがこれに対応出来たのである。一八六〇年二万一千ブッシェルだったアメリカの小麦輸出は、六一~六三年平均七万四千ブッシェルに急増した。牛肉、豚肉とこれらの製品も一八六〇~六一年平均一七万三千ポンドから、六二~六四年平均四三万ポンドへと伸びた。

戦後の農産物貿易は一時旧に復したが、七〇年代に入ってアメリカからの食糧輸出は、第四表にみるように再び著しい増加を示す。また戦後アメリカ綿花の市場復帰によって打撃を受けたインド綿作は、急速に小麦作へと転換して大きな小麦輸出国として世界市場に登場した。南北戦争を契機とする食糧輸出の

第5表 鉄道の発達 (単位：マイル)

	1840	1860	1880	1897
世界合計	4,515	66,290	228,440	442,200
ヨーロッパ計	1,679	31,885	101,720	161,200
うちイギリス	838	10,430	17,930	21,280
フランス	360	5,880	14,500	26,020
ドイツ	341	6,980	20,690	28,880
ロシア	16	990	14,020	27,270
アメリカ	2,820	30,630	93,670	182,600
カナダ	16	2,090	6,890	16,960
インド	-	840	9,310	22,170
日本	-	-	75	2,500

注. M. G. Mulhall, *The Dictionary of Statistics*, 4th ed. 1909, pp. 495, 794, 795.

増加は、戦争とか不作とかの一時的原因以外の、農産物貿易を拡大させる新しい要因にもとづく面があったのである。その一つはイギリス以外のヨーロッパ諸国の工業化の進展が、イギリスと同じような農産物市場を、ヨーロッパ大陸にも生み出したことであつた。もう一つは七〇年代からようやくはつきりしてくる交通革命であつた。⁽¹⁾それ
は一九世紀のあらゆる産業発展のなかで、統一的な世界経済の生長にとつてもっとも劇的な効果をもたらした。⁽²⁾

産業革命以後、イギリスを初めてとして交通手段の改善には多くの努力が払われてきた。道路の改善から運河の時代を、アメリカや多くのヨーロッパ諸国は経験した。しかし陸上交通において決定的となつたのは、いうまでもなく一八二五年に始まる鉄道であつた。鉄道の一九世紀後半における目覚ましい発展は第五表に示されている。鉄道の役割がもっとも大きかつたのは、前にもふれたようにアメリカであつた。五〇年代に始まるアメリカの鉄道時代は、西部開拓の時代であつた。南北戦争中に成立したホームステッド法は、大量の移民が未開の大平原に入植するのを促進した。鉄道はこれらの西部の農民が、無地代の安いコストで生産した農産物を、東部へ、更に大西洋をこえてヨーロッパへと運ぶ動脈となつた。一八五〇年には西ヨーロッパとミシシッピ流域とを結ぶルートは、鉄道によって作られていた。シカゴ—ニューヨーク軸は、カナダと南部を押さえて確立し、アメリカは南北から東西へとそのオリエンテーションを転換した。北部鉄道網は

第6表 海運の発達 (1820~1896年)

(単位:千トン)

	名 目 ト ン 数			積 載 能 力		
	汽 船	帆 船	計	汽 船	帆 船	計
1820	20	5,814	5,834	80 (1.4)	5,814 (98.6)	5,894 (100.0)
1840	368	9,012	9,380	1,470 (14.0)	9,012 (86.0)	10,482 (100.0)
1860	1,710	14,890	16,600	6,840 (31.5)	14,890 (68.5)	21,730 (100.0)
1880	5,880	14,400	20,280	23,500 (62.0)	14,400 (38.0)	37,900 (100.0)
1896	13,045	11,045	24,090	52,200 (82.5)	11,050 (17.5)	63,250 (100.0)

注. M. G. Mulhall, *op. cit.*, pp. 521, 801, 802. () 内は%.

南北戦争における北部の勝利の要因であった。⁽³⁾

アメリカのような新開国にとつてと同じく、鉄道の意義は旧開農業国においても大きかった。ロシアの鉄道は内陸の農産物をバルト海や黒海へと運び、東ヨーロッパの鉄道は西ヨーロッパへと農産物を運んだ。インドについてはすでにふれたが、後進農業国の場合、鉄道は自国の経済発展の必要によってではなく、先進国の利益、その貿易上の必要によって作られた。⁽⁴⁾ それ故それは国内市場の発展を意味するものではなかった。しかしとにかく鉄道は、各大陸の内部に深く侵入し、未開発地域を全面的に世界市場へと引き込んだ。

鉄道と並ぶ交通革命のもう一つの主役は、水運、ことに海洋交通における汽船であつた。汽船の出現は鉄道より早かつたが、その海上制覇はゆっくりしていった。第六表にみるように、汽船は名目トン数において帆船を抜くのは九〇年代であり、帆船の四倍として計算された積載能力で帆船を抜くのは七〇年代であつた。しかし海上運賃自体は一九世紀を通じて大幅に下がった。下落は一八一五〜五一年と一八七〇〜一九〇九年(この時期は航路によって若干ずれがある)の二時期にわたっている。第一期は勿論、第二期の七三〜八四年の期間の大きな運賃の下落も帆船によるものであつた。帆船の技術進歩も大きかつたし、汽船自体の性能も低かつたのである。また貿易の発展そのものが、また新開国の発展が、規模の

第7表 アメリカからの運賃の推移 (1870~1899年)

5 カ年平均	アメリカ輸出 の運賃指数 ¹⁾	小麦運賃 (クォーター当たりペンス) ²⁾		
		シカゴーニュー ヨーク間鉄道	ニューヨークターリ バプール間船舶	計
1870~1874	94	113	66	179
1875~1879	87	72	60	132
1880~1884	77	63	35	98
1885~1889	54	61	25	86
1890~1894	55	53	20	73
1895~1899	53	47	23	70

注. 1) は 1830=100 とした bulk commodities の数量による ウェイト のつけられた運賃指数, 5 カ年平均は筆者計算, D. C. North, "Ocean Freight Rates and Economic Development 1750-1913", *The Journal of Economic History*, Vol. XVIII, No. 4, Dec. 1958, p. 549.

2) は M. Tracy, *Agriculture in Western Europe; Crisis and Adaptation since 1880*, p. 22. 阿曾村・瀬崎訳『西欧の農業』, 10頁.

経済とくに外部経済を生み出した。港の費用や停泊時間は減少し、返り荷は増加した。⁽⁵⁾

汽船が決定的に帆船に勝つのは、鋼鉄製の複式機関をつけた汽船が登場してからである。複式機関は従来の単式機関にくらべて、石炭の消費量は半分になったが、それでも積荷に比し多くの石炭をのせねばならなかった。しかも遠距離航路には各所に給炭地を必要とした。⁽⁶⁾ 汽船はしかしスピードと規則性において帆船に勝り、従って資本の回転を早めた。それは正に発展した資本主義が要求するものだったのである。⁽⁷⁾ 一八六九年のスエズ運河の開通は東方航路に汽船を登場させる契機となり、ひいては長距離海運に汽船が台頭する刺激となった。⁽⁸⁾ 一八八〇年代以降、汽船は積載能力において帆船を大きく抜き、九〇年代には完全に帆船を圧倒し去った (第六表)。

交通革命、あるいは電信 (海底電線を含む) による通信革命は、人、物、情報の動きをスピード・アップしたが、なんといつても輸送費の軽減が最大の効果であったことは言うまでもない。第七表にみるように、一八七〇年代から世紀末までにアメリ

カのかさばる、商品の輸出運賃は半減し、小麦の大西洋横断運賃は三分の一になった。さらにアメリカの内陸鉄道運賃の下落（これもたんに鉄道技術の進歩によるのではなく、競争や規模の経済が作用していた）と相まって、シカゴ・リバプール間のクォーター当たり小麦運賃は、七〇年代前半の一七九ペンスから九〇年代後半の七〇ペンスに下がった。個々の、ある期間の運賃の下落はもっと劇的であった。一八七三年から一九〇一年の間、ニューヨーク・リバプール間小麦運賃は七分の一以下に、七三〇九六年の間のオーストラリアからの羊毛運賃は半分に、七三〇一九〇五年の間のインドからのジュート運賃は四分の一になった。⁽⁹⁾同じく七三〇八七年のニューヨーク・リバプール間運賃で、豚肉は六分の一、チーズは三分の一以下、綿花は半分以下になった。⁽¹⁰⁾

この時期に交通革命と結びついた冷凍技術の発達が、畜産物貿易を著しく拡大したことも指摘しておく必要がある。一九世紀中葉の畜産物貿易は、イギリスを主たる市場としてヨーロッパ内で行われていた、生畜と加工品の貿易であった。前述したようにアメリカが六〇年代以降それに加わってきた。冷凍技術の発達によってアルゼンチンやオーストラリアが牛肉と羊肉を冷凍肉の形態で赤道をこえて輸出出来るようになると、肉の輸出の主導権も新開国へと移った。一八七四年にアメリカからイギリスに、最初の冷凍牛肉が輸出されて以来、七七〇一一年以後二〇年間にアメリカの冷凍牛肉の輸出は三倍以上になった。しかし一九〇九〇一三年になると、冷凍肉の輸出国は、アルゼンチン、オーストラリア、ニュージーランドが中心となった。⁽¹¹⁾

注(1) これまでの記述は主として E. C. Nourse, *American Agriculture and the European Market*, 1924, pp. 16-28.

(2) W. Woodruff, "The Emergence of an International Economy 1700-1914, C. M. Cipolla ed., *The Fontana Economic History of Europe*, IV, Part II, 1973, p. 688.

(3) H. J. Habakkuk & M. Postan ed., *The Cambridge Economic History of Europe*, Vol. VI, Part I, 1965,

pp. 223-224.

- (4) W. Woodruff, *op. cit.*, pp. 692-693.
- (5) D. C. North, "Ocean Freight Rates and Economic Development 1750-1913", *The Journal of Economic History*, Vol. XVIII, Dec. 1958, pp. 542-543, 546-547.
- (6) M. E. Fletcher, "The Suez Canal and World Shipping, 1869-1914", *The Journal of Economic History*, Vol. XVIII, No. 4, Dec. 1958, pp. 557-558.
- (7) W. Woodruff, *op. cit.*, p. 694.
- (8) M. E. Fletcher, *op. cit.*, pp. 558, 563.
- (9) D. C. North, "Ocean Freight Rates.....", (*op. cit.*), pp. 544-545.
- (10) W. Woodruff, *op. cit.*, p. 696.
- (11) L. B. Bacon & F. C. Schloemer, *World Trade in Agricultural Products, Its Growth, Its Crisis, and the New Trade Policies*, 1940, pp. 179-180.

三 世界農産物貿易の発展

交通革命の世界貿易に及ぼした影響は著しかった。そもそも産業革命は機械制工場制工業を確立して、資本制的商品経済を国民経済の全分野に浸透させて国内市場を完成した。同時にまたそれはイギリス国内にとどまらずに、その革命を海外に押し広め、前述したイギリス体制を作り上げたのである。しかし当時の交通機関の下では、その影響する範囲は限られていた。イギリスを中心とするヨーロッパと、大西洋をはさんだアメリカ大西洋岸、カリブ海諸島の北大西洋、地中海であり、ヨーロッパの伝統的な貿易の型をこえるものではなかった。インドを主とするアジアでの貿易も、形の上では近世以来の東方貿易を拡大再生産したものであった。⁽¹⁾世界経済はもっぱら大西洋経

第8表 海上輸送による主要商品の貿易量（年平均，重量）（単位：百万トン）

	1840	1861~1870	1871~1880	1880	1887
石炭	1.4	20.3	30.9	39.2	49.3
鉄	1.1	4.2	6.0	8.5	11.8
木材	4.1	6.3	8.0	9.0	12.1
穀物	1.9	4.4	11.2	16.8	19.2
砂糖	0.7	1.2	1.8	2.9	4.4
石油	—	0.2	1.4	2.1	2.7
綿花	0.4	0.6	1.0	1.2	1.8
羊毛	0.02	0.1	0.3	0.3	0.4
ジュート	—	0.1	0.3	0.4	0.6
肉類	—	0.1	0.4	0.7	0.7
コーヒー	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6
ブドウ酒	0.2	0.5	0.9	1.2	1.4
塩	0.8	1.0	1.2	1.3	1.3
雜貨	9.2	16.7	24.3	29.0	33.8
計	20.0	56.0	88.0	113.0	140.1

注. M. G. Mulhall, *op. cit.*, p. 130.

済だったのである。

交通革命によって初めて、旧来と違ったより広い世界の地域が貿易、従って商品経済の網の目へと引き込まれた。本来的な世界市場が初めて成立したのである。この世界市場はたんに地理的に拡大し、多くの国々を包含しただけではなくて、その深さにおいて、つまり商品経済による相互依存関係の強さにおいて、また旧来のそれとは違っていた。資本主義的な世界経済はいまや、国際分業の網の目によっておおわれた統一体となった。かくて交通革命は経済的重要性において産業革命に比肩しうるものであった。事実それは産業革命の結果であり完了であるともいえるのである。⁽²⁾

第八表は大ざっぱな数字であるが、海上輸送の革新が貿易にもたらした影響を伝えている。一八四〇年から八七年にかけて、もっとも増加した貨物は石炭、鉄、穀物である。つまりかさばって重い、しかも価格の安い貨物の伸びが著しい。運賃負担力の低いこれら

の商品は、海上運賃の下落によって初めて遠距離貿易に乗ったのである。八〇年代までの海上運賃の下落は、前述したように必ずしも汽船によるものではなかった。しかしイギリスへの小麦輸送における運賃率 (freight factor, 運賃／価額) は、七〇年頃から二〇世紀初頭にかけて半分前後に下がり、ことに遠距離からの輸入ほど下がり方が大きくなっているが、このことは小麦価格のこの時期の下落以上に運賃が下がったこと、そしてそれが遠くへの輸出にとってより有利に働いたことを示している。⁽³⁾

穀物貿易は比較的古くから行われていた。第一に不作による不足が理由であったが、オランダ、ベルギー、イタリーの貿易都市のように人口の少ない小国では、恒常的な輸入依存もみられた。これらの国々は海運と貿易によって立ち、輸入した特産物の再輸出によってその輸入を支払っていた。しかしその輸入比率自体は小さなものでしかなかった、⁽⁴⁾一七世紀後半から一八世紀前半にかけて、イギリス自身も小麦の輸出国であった。また伝統的にバルト海南岸諸国は穀物の輸出国であり、産業革命以後のイギリスの輸入先であった。これらの穀物貿易は量的にも小さく、近距離の貿易であった。⁽⁵⁾

前にみたように一九世紀前半のイギリスの農産物の主要輸入先はヨーロッパであった。遠くから運ばれてくるものは、綿花を除けば、砂糖、茶、コーヒー、香料、絹等の伝統的な熱帯や東洋の特産物であり、一九世紀の初頭にはまだ奢侈品とみられていたものであった。だから一九世紀中葉でもヨーロッパは全体としてみれば、自給自足的だったのである。全輸出にしめるヨーロッパ諸国の輸出のシェアは、小麦五三%、とうもろこしの六〇%、ライ麦の殆ど全部、大麦の八五%、えん麦、バター、チーズの九五%に達した。⁽⁶⁾

変化は五〇年代以降に起こった。第九表は穀物輸出の変化をしめしている。一八五四と五八年の穀物輸出国は大

第9表 穀物輸出の発展

(単位: %)

輸出国	アメリカ	カナダ	ロシア	ダン ニ ユ ー 諸 国	アル ゼ ン チ ン	オース トラ リア	インド	ドイツ	その他	合 計
一八五四～一八五八										千トン
小麦	24.9	6.4	12.0	9.8	—	—	3.2	—	43.7	2,544
大麦	—	4.9	16.0	19.7	—	—	—	—	59.4	350
ライ麦	0.8	—	38.4	8.7	—	—	—	17.4	34.7	390
えん麦	—	4.8	30.1	7.7	—	—	—	—	57.4	272
とうもろこし	36.3	—	10.5	41.3	—	—	—	—	11.9	535
計	20.3	4.7	15.9	14.5	—	—	2.0	(1.7)	41.0	4,091
一八八四～一八八八										
小麦	35.8	1.2	25.3	18.6	1.4	2.4	10.1	—	5.2	9,500
大麦	0.8	10.3	43.6	26.2	0.1	—	—	—	19.0	1,910
ライ麦	2.5	0.3	68.7	14.0	—	—	—	6.5	8.0	2,027
えん麦	2.6	2.7	66.0	10.1	—	—	—	—	18.6	1,414
とうもろこし	44.2	—	15.0	30.9	8.4	—	—	—	1.5	2,590
計	26.7	2.0	34.1	20.0	2.0	1.3	5.5	(0.8)	7.6	17,441
一九〇九～一九一三										
小麦	14.5	12.6	22.3	15.8	13.2	6.9	7.1	—	7.6	19,696
大麦	3.3	1.9	67.1	12.2	0.3	—	—	—	15.2	5,536
ライ麦	0.7	0.1	27.3	20.3	0.3	—	—	43.3	8.0	2,399
えん麦	4.3	6.0	35.8	11.7	20.3	0.1	—	—	21.8	3,041
とうもろこし	16.2	—	11.2	23.9	43.2	—	—	—	5.5	6,800
計	11.4	7.4	28.3	17.8	14.9	3.6	3.7	(2.8)	9.2	37,472

注. —は国名の記載のないもの。従ってその他に含まれる場合がある。ことにドイツの場合がそうなので穀物全体のシェアは正確ではないのでカッコした。他の国は記載がない場合は事実上無視しうる量である。出所は、R.M. Stern, "A Century of Food Exports", *Kyklos*, XIII, Fasc. I, 1960, pp. 58-60. 但し、穀物計は筆者の計算である。

七〇

きく三つのグループに分かれている。アメリカ・カナダ、北米、二五%、ロシア・ダンニユ諸国、東欧（この引用文献では定義されていないが、IIAの資料ではハンガリー、ルーマニア、ユーゴスラビア、ブルガリアをさしている）三〇%、その他（大部分西ヨーロッパ諸国）四三%である。穀物によつては北米が少なく、東欧と西欧に分かれるもの（大麦、ライ麦）、西欧が

少なくアメリカと東欧に分かれるもの（とうもろこし）があるが、東欧はいずれの穀物でも二二・五二%を占めている最大の穀物輸出地帯であった。ロシアの輸出は北方経由のものはバルト海貿易に属して近距離貿易であり、黒海経由のものはむしろ遠距離貿易に属するとみられるが、その行先によっても違っていた。鉄道による場合、西欧と東欧との距離は近かった。

一八八四～八八年になると東欧の比重は五四%に達し、北米の二九%とともに穀物輸出を独占することになる（なおインドが小麦で一〇%のシェアを占める）。東欧はライ麦、えん麦については八三%、七六%と殆ど独占的な地位に立つ。西欧は輸出国としての地位を殆ど失う。一九〇九～一三年になるとアメリカの位置は小麦、とうもろこしにおいて大幅に落ち、穀物全体でのシェアも五〇年代を下回るに至る。しかしカナダは小麦、えん麦において大きくシェアを伸ばしている。一方東欧のシェアもロシアの大麦、ダニューブ諸国のライ麦、えん麦以外はいずれも落ち、穀物全体で四六%と過半を割る。かわって台頭するのはアルゼンチン（全穀物、ことにとうもろこし、えん麦、小麦）、オーストラリア（小麦）、ドイツ（ライ麦）である。カナダ、アルゼンチン、オーストラリアの新開国が、二六%のシェアを占めて新しい一つのグループを作ってくるといってよい。つまり五〇年代すでに台頭していた東欧、新開国は、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて、その内部での変化はあるにしろ、世界穀物市場を制圧するわけである。ことに指導的な役割を果たすのは東欧であった（なお一八五四～五八年のロシアの輸出は、クリミア戦争のために過少にあらわれている。ロシアの穀物の一部はドイツ経由で輸出され、ドイツを過大に表わしている。⁷⁾なおドイツのライ麦輸出の特殊性は後述）。

第一〇表の肉類の輸出は生畜輸出を含まないから、二〇世紀以前については肉類の包括的な数字ではない（二〇

第10表 肉類輸出の発展

(単位：%)

輸 出 国	牛 肉			豚肉(含ベーコン、ハム)			羊 肉	
	1854~ 1858	1884~ 1888	1909~ 1913	1854~ 1858	1884~ 1888	1909~ 1913	1884~ 1888	1909~ 1913
ア メ リ カ	45.5	43.0	5.6	78.7	71.0	46.1	-	-
カ ナ ダ	-	0.6	0.3	2.1	1.3	5.4	-	-
デ ン マ ー ク	3.0	1.1	2.9	6.4	7.6	28.4	-	-
オ ラ ン ダ	-	-	2.8	-	-	8.3	-	-
アルゼンチン	-	15.7	52.3	-	-	-	-	26.8
ウルグアイ	21.2	22.4	11.3	-	-	-	-	1.2
オーストラリア	-	2.2	12.5	-	-	0.2	9.5	26.8
ニュージーランド	-	1.7	3.1	-	-	-	85.7	40.9
そ の 他	30.3	13.3	9.2	12.8	20.1	11.6	4.8	4.3
合 計 {	(%) 100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
{(千トン)	33	179	611	47	303	408	21	257

注. 数字のない国が輸出がないとは限らないで、その他に含まれている場合もある。R. M. Stern, *op. cit.*, p. 60 による。

世紀以後は冷凍肉貿易の拡大によって、生畜輸出は減少する。しかし牛肉の輸出は一八五四〜五八年には、アメリカ、ウルグアイ、西欧諸国（その他）に三分されていた。八四〜八八年にはアルゼンチンが台頭して西欧が減少し、一九〇九〜一三年になるとアメリカは大きく後退し、アルゼンチンが五二%と過半を占め、ウルグアイは絶対量は伸びたがシェアは半減し、オーストラリアが大きく伸びてウルグアイを抜く。デンマーク、オランダ、ニュージーランドも無視しえないシェアを示している。全体として二〇世紀初頭には牛肉輸出では、アルゼンチン、ウルグアイ、オーストラリア、ニュージーランドの新開国のシェアが約八〇%を占めるに至っている。

豚肉は一八五四〜五八年から既にアメリカのシェアが八〇%近かった。八四〜八八年にもそのシェアは若干下がるが、そしてデンマークを初めとする西欧諸国がシェアを伸ばすが、依然として七一%であった。しかし一九〇九〜一三年には四六%と大幅にシェアを下げたばかりか、実際の

第11表 酪農製品輸出の発展

(単位: %)

輸 出 国	バ タ ー			チ ー ズ		
	1854~ 1858	1884~ 1888	1909~ 1913	1854~ 1858	1884~ 1888	1909~ 1913
ア メ リ カ	2.7	5.5	0.6	5.4	28.0	0.8
カ ナ ダ	2.7	1.6	0.6	—	24.0	30.0
デ ン マ ー ク	13.5	16.5	27.4	—	—	0.8
オ ラ ン ダ	37.8	11.8	10.5	46.3	20.7	22.9
他 ヨ ー ロ ッ パ	43.3	63.8	41.9	48.3	26.7	34.0
アルゼンチン	—	—	0.9	—	—	—
オーストラリア	—	—	10.8	—	—	1.6
ニュージーランド	—	0.8	5.5	—	0.6	9.9
そ の 他	—	—	1.8	—	—	—
(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
計 (千トン)	37	127	325	56	150	253

注. R. M. Stern, *op. cit.*, p. 61.

数量においても減少し、デンマーク、オランダ、カナダが台頭する。豚肉輸出は西欧のシェアが回復した商品であった。羊肉の場合、五〇年代の資料がないが、八四〜八八年にはニュージーランドに集中していたのが、一九〇九〜一三年にはオーストラリア、アルゼンチンにも分散している。しかしいずれも新開国であることには変わりなかった。

酪農製品の場合は違っていた。第一一表にみるように、バターの輸出は五〇年代から二〇世紀初頭にかけて、主要輸出国はオランダ、デンマークを中心とするヨーロッパ諸国であり、内部での位置の変化はあるにしても、ヨーロッパ以外では一九〇九〜一三年にオーストラリア、ニュージーランドの台頭（一六%）が目立つのみである。チーズの場合は五〇年代はオランダ、その他ヨーロッパで九五%を占めるものの、八四〜八八年にはアメリカ、カナダが急速に伸びて五二%になり、一九〇九〜一三年にはカナダ、オーストラリア、ニュージーランドで四二%になる。新開国とヨーロッパがほぼ半分半分になるわけである。同じ酪農製品でも、バターとチーズ

とはかなり異なった動向を示していた。

ところで一九世紀後半における食糧輸出国の変化以上に、強調する必要があるのはいうまでもなく輸出量自体の著しい増大であった。第一二表にみるように小麦の輸出は、一八五四―五八年の二五四万トンが八四―八八年の九五〇万トンへと七・八倍になった。同じく大麦一六倍、ライ麦六倍、えん麦一倍、とうもろこし一三倍である。そして穀物全体では九倍であった。伸び率からいえば五〇年代から八〇年代にかけての三〇年間が、それ以後の三〇年間より大きかった。

肉類の場合（第一〇表）、一九世紀の第三・四半期までは冷凍肉がなかったため、五〇年代の貿易量自体が少なかった。そのため牛肉の場合、六〇年間の伸びは二〇倍にもなる。そして牛肉、羊肉では冷凍肉輸送が始まる八〇年代以降に著しく輸出が伸びた。しかしもともと保存のきく形態で輸出されていた豚肉では、その輸出の増加は五〇年代から八〇年代に目覚しかった。酪農製品の場合（第一一表）、五〇年代から八〇年代の伸びが大きい、穀物、肉類に比べれば相対的には小さかった。

この六〇年間における食糧輸出の発展は、当然のことながら輸入、即ち需要の増大に対応するものであった。増大する輸入需要はどこからきたのであろうか。イギリス体制の下では、イギリスは最大の農産物輸入国として君臨していた。五〇年代にイギリスは肉類輸出の五分の一、小麦、チーズ輸出の三分の一、とうもろこし、大麦、えん麦輸出の半分以上、バター輸出の四分の三を輸入していた。⁽⁸⁾しかし第一二表にみるように穀物においてはその位置は徐々に低下していった。五〇年代の四〇％近かったシェアは、第一次大戦前には二五％となった。もともと牛肉のように八〇年代以降著しくシェアを高めているものもあったし、バター、チーズ、豚肉もそのシェアは増加傾向

にあったといつてよい。つまりイギリスは穀物では世界輸入に占めるシェアを低下させる一方、畜産物ではその輸入を急速に拡大させ、その独占的な位置をなお維持しているのである。

増大する輸入需要が、もともと多くイギリスから来たとしても(とくに畜産物)、穀物の需要はより多く他の国々から来た。ヨーロッパ諸国の小麦輸入の変化は第一三表に示される。七〇年代前半ヨーロッパの小麦輸入の七〇%

第12表 イギリス(U.K.) 食糧輸入の世界貿易におけるシェア

(単位:千トン)

	1854~1858平均			1884~1888平均			1909~1913平均		
	世界輸出量 (A)	イギリス輸入量 (B)	B/A %	世界輸出量 (A)	イギリス輸入量 (B)	B/A %	世界輸出量 (A)	イギリス輸入量 (B)	B/A %
小麦	2,544	803	32	9,500	2,736	29	19,696	5,249	27
大麦	350			1,910	788	41	5,536	1,087	20
ライ麦	390			2,027	-	-	2,399	41	2
えん麦	272	787	51	1,414	739	52	3,041	915	30
とうもろこし	535			2,590	1,462	56	6,800	2,114	31
穀物計	4,091	1,590	39	17,441	5,725	33	37,472	9,406	25
牛肉	33	-	-	179	53	30	611	414	68
豚肉	47	-	-	303	215	71	408	312	76
バター	37	23	62	127	(80)	(63)	325	212	65
チーズ	56	20	36	150	94	63	253	120	47

注. バターの1884~1888年は1886~1888年平均をとる. 小麦には小麦粉を含まない. 穀物計には本表に記載のないものは含まれない. なお, 1854~1858年の大麦→とうもろこしのイギリス輸入量は分離出来ないもので, 1884~1888年の各品目の大体のウェイトによって1英デシタル=22.5kgとして計算した. (A)は R.M. Stern, *op. cit.*, pp. 58-61, (B)は Great Britain Central Statistical Office, *Statistical Abstract for the United Kingdom*, various issues による.

第13表 ヨーロッパの小麦（含小麦粉）輸入の発展（5カ年平均）

（単位：10万トン，%）

年次	イギリス イギリス	ベルギー オランダ	ドイツ フランス	イタリア フランス	デンマーク ノルウェー スウェーデン	合計	
1871～1875	26 (70)	5 (14)	— 1 (— 3)	4 (11)	3 (8)	— 0 (— 0)	37 (100)
1876～1880	33 (59)	8 (14)	2 (4)	11 (20)	3 (5)	— 1 (— 2)	56 (100)
1881～1885	38 (56)	9 (13)	6 (9)	11 (16)	3 (4)	1 (1)	68 (100)
1886～1890	39 (52)	12 (16)	5 (7)	10 (13)	8 (11)	1 (1)	75 (100)
1891～1895	48 (51)	16 (17)	10 (11)	13 (14)	6 (6)	2 (2)	95 (100)
1896～1900	47 (51)	18 (19)	12 (13)	6 (6)	7 (8)	3 (3)	93 (100)
1901～1905	46 (43)	23 (21)	20 (19)	3 (3)	11 (10)	4 (4)	107 (100)
1909～1913	59 (44)	26 (19)	21 (16)	9 (7)	15 (11)	4 (3)	134 (100)

注：小麦粉は1.333倍して小麦に換算して加える。輸入は輸入超過量である。K. Ritter, *Agrarwirtschaft und Agrarpolitik in Kapitalismus* (*Grundriss der Agrarökonomie, Zweiter Abteilung*), Erster Halband, S. 440.

を占めていた連合王国の輸入は、一九〇九〜一三年の四四%にまで下がる。この間、シエアを拡大したのは、ドイツ、イタリーの大国、ベルギー、オランダ、スイス、デンマーク、ノールウェイ、スウェーデン等の小国群であった。別の資料によつて一九〇九〜一三年平均の世界の穀物輸入を第一四表にみると、イギリスの小麦輸入のシエアは三四%であり、大麦二一%、えん麦三三%、とうもろこし三二%で穀物全体で三〇%であった。これに対しドイツは大麦において五九%のシエアを占め、えん麦でも二〇%、小麦でも一四%になり、全穀物で二一%とイギリスに次ぐ輸入国になっている。フランス、イタリー、ベルギー、オランダ、スイスの各国の合計のシエアは、穀物全体で二六%に達した。かくてイギリスがなお最大の輸入国だとしても、世界の全輸入の約八〇%を占める西ヨーロッパ

パの穀物輸入は、一九〇九〜一三年にはイギリス、ドイツ、その他西欧諸国の三つに分かれているのである。

肉についての資料はないが、一九〇九〜一三年の生畜の輸入をみると肉牛一七八万頭のうち一九%がアメリカ、一二%がドイツ、九%がイギリス、七%がロシア、六%がイタリーの輸入であった。豚の場合七二万頭のうち二〇%がフランス、一七%がドイツの輸入であった。バターの場合は三二万トンの輸入のうち六六%がイギリスであり、一六%がドイツであった。⁽⁹⁾ バターを除いてはもはやイギリスは、必ずしも最大の輸入国ではなかった。

第14表 世界の穀物輸入(1909〜1913年平均)

(単位:千トン, %)

輸 入 国	小麦・小麦粉	ラ イ 麦	大 麦	え ん 麦	とうもろこし	合 計
イ ギ リ ス	5,970 (34)	41 (2)	1,087 (21)	915 (33)	2,114 (32)	10,127 (30)
ド イ ツ	2,442 (14)	391 (19)	3,083 (59)	557 (20)	817 (12)	7,290 (21)
フ ラ ン ス	1,053 (6)	53 (3)	138 (3)	397 (14)	475 (7)	2,116 (6)
イ タ リ ー	1,556 (9)	12 (1)	18 (0)	118 (4)	378 (6)	2,070 (6)
ベ ル ギ ー	1,398 (8)	110 (5)	330 (6)	113 (4)	460 (7)	2,411 (7)
オ ラ ン ダ	598 (3)	282 (14)	207 (4)	109 (4)	529 (8)	1,725 (5)
ス イ ス	451 (3)	19 (1)	24 (1)	176 (6)	101 (2)	771 (2)
プ ラ ジ ル	565 (3)	- (—)	- (—)	- (—)	5 (0)	570 (2)
オーストリー・ハンガリー	243 (1)	38 (2)	15 (0)	34 (1)	352 (5)	682 (2)
小 計	14,276 (81)	946 (47)	4,902 (94)	2,419 (87)	5,231 (80)	27,762 (81)
世 界 計	17,530 (100)	2,022 (100)	5,221 (100)	2,792 (100)	6,572 (100)	34,137 (100)

注: イギリスはワイエルランドを含む。ベルギー、オランダは純輸入。出所は L. B. Bacon & F. C. Schoemer, *op. cit.*, pp. 62-76. 一部は同一資料による Institute International D'agriculture, *Annuaire International de Statistique Agricole*, 1915 et 1916, 1917 により補った。

第15表 砂糖の貿易 (1909~1913年平均)

	輸 出			輸 入		
	国 名	千トン	%	国 名	千トン	%
甘 蔗 糖	世 界 計	7,866	100.0	世 界 計	7,681	100.0
	キ ュ ー バ	1,833	23.3	ア メ リ カ	2,808	36.6
	アメリカ植民地	1,310	16.7	イ ギ リ ス	1,843	24.0
	インドネシア	1,047	13.3	英 領 イ ン ド	629	8.2
	モ ー リ シ ア ス	205	2.6	日 本	310	4.0
	英領カリブ諸国	203	2.6	中 国	301	3.9
	合 湾	157	2.0	カ ナ ダ	270	3.5
	ペ ル ー	133	1.7	ト ル コ	179	2.3
ビ ー ト 糖	ド イ ツ	792	10.1	フ ラ ン ス	169	2.2
	オーストリー・ ハンガリー	770	9.8	イ ラ ン	112	1.5
	ロ シ ア	266	3.4	ス イ ス	107	1.4
	フ ラ ン ス	188	2.4	英 領 マ レ ー	80	1.0
	オ ラ ン ダ	182	2.3	チ リ ー	77	1.0
				オ ラ ン ダ	75	1.0

注. アメリカ植民地とはハワイ、プエルトリコ、フィリピン。英領カリブ諸国とは英領ギアナ、トリニダード・トバコ、バルバドス、ジャマイカ、セント・キット、アンティグア、セント・ルシア、セント・ヴィンセント、英領ホンジュラスである。出所は前表の資料の174-177頁。

一九〇九一三年の砂糖の貿易は第一五表に示されている。この時期になると砂糖は甘蔗糖とビート糖に分かれたが、その輸出国もキューバ(二三%)を筆頭にインドネシア(一七%)、アメリカの三植民地(一二三%)、ドイツ(一〇%)、オーストリー・ハンガリー(一〇%)と多様化している。輸入国ではアメリカ(三七%)とイギリス(三四%)がとび抜けており、他は大きく分散していた。第一六表は同じく茶の貿易である。茶の輸出国はインド、セイロン、中国の三つに集中し、その輸入はイギリスが四三%と断然トップを占めロシア、アメリカがこれに次いでいた。茶は国の食習慣によって一人当たり消費量に大きな差があり、欧米諸国ではコーヒーを嗜好する国も多かった。アメリカ、ドイツ、フランス、オランダ、ベルギー等がそれであり、こ

第16表 茶の貿易(1909~1913年平均)

輸 出			輸 入		
国 名	ト ン	%	国 名	ト ン	%
世 界 計	383,500	100	世 界 計	371,800	100
イ ン ド	121,900	32	ロ シ ア	71,500	19
セ イ ロ ン	85,700	22	ア メ リ カ	44,900	12
中 国	90,000	24	カ ナ ダ	16,400	4
インドネシア	26,500	7	オーストラリア	16,100	4
日 本	18,200	5	イ ギ リ ス	158,400	43
台 湾	11,400	3	中 国	9,700	3
イ ギ リ ス	23,600	6	オ ラ ン ダ	5,200	1
			イ ラ ン	4,700	1

注. 出所は L. B. Bacon & F. C. Schloemer, *op. cit.*, pp. 368-369.

第17表 綿花の貿易(1909~1913年平均)

	輸 出			輸 入		
	国 名	千トン	%	国 名	千トン	%
第一次輸出国	世 界 計	3,257	100.0	世 界 計	3,155	100.0
	ア メ リ カ	2,002	61.5	イ ギ リ ス	1,030	32.6
	イ ン ド	426	13.1	ド イ ツ	457	14.5
	エ ジ プ ト	313	9.6	日 本	312	9.9
	中 国	52	1.6	フ ラ ン ス	311	9.9
	ペ ル ー	19	0.6	オーストリー	196	6.2
	ト ル コ	19	0.6	・ハンガリー		
	ブ ラ ジ ル	18	0.6	イ タ リ ー	194	6.1
第二次輸出国				ロ シ ア	192	6.1
	イ ギ リ ス	127	3.9	ベ ル ギ ー	108	3.4
	フ ラ ン ス	68	2.1	ス ペ イ ン	83	2.6
	ベ ル ギ ー	57	1.8	オ ラ ン ダ	60	1.9
	ド イ ツ	46	1.4	ア メ リ カ	47	1.5
	オ ラ ン ダ	31	1.0	カ ナ ダ	34	1.1

注. 出所は前表と同じ資料の496-418頁による。

第18表 羊毛の貿易 (1909~1913年平均)

	輸 出			輸 入		
	国 名	千トン	%	国 名	千トン	%
第一次輸出国	世 界 計	982	100.0	世 界 計	1,048	100.0
	オーストラリア	283	26.2	イ ギ リ ス	363	43.7
	アルゼンチン	145	13.4	フ ラ ン ス	212	20.2
	ニュージーランド	85	7.9	ド イ ツ	201	19.2
	南アフリカ	66	6.1	ア メ リ カ	94	9.0
	ウルグアイ	63	5.8	ロ シ ア	48	4.6
	英領インド	29	2.7	ベルギー・ルクセンブルグ	47	4.5
	中 国	17	1.6	オーストリー・ハンガリー		
					29	2.7
第二次輸出国	イ ギ リ ス	171	15.7	イ タ リ ー	14	1.3
	フ ラ ン ス	38	3.5	日 本	5	0.4
	ド イ ツ	15	1.4	カ ナ ダ	4	0.3

注. ベルギー・ルクセンブルグの輸入は純輸入。両国の輸出は通過貿易が多いため世界計に含まれない。資料の出所は前表と同じで、446-447頁による。

の五カ国でコーヒーの全輸入の七二%（一九〇九〜一三年）を占め、イギリスはその次に位置し三%のシエアにすぎなかった。⁽¹⁰⁾ 茶を主として嗜好する国は、イギリスとその文化圏を除けば、欧米ではロシアに限られていた。だからイギリスのシエアの高さは割引いて考えねばならない。

綿花の輸出は一九〇九〜一三年になっても圧倒的にアメリカの独占であった（第一七表）。第二位のインド、第三位のエジプトも、それぞれアメリカと品質を異にする綿花を栽培することで、一三%、一〇%のシエアを保っていたが、アメリカの六二%という位置は余りにも大きかった、輸入ではイギリスはなお三分の一を占めていたが、ドイツ、日本を先頭とする後進工業国に追い上げられ、しかもこれらの国々はその綿花を加工して綿製品として輸出することで、マンチエスターの独占的位置をおびやかしていた。

ヨーロッパの伝統的商品たる羊毛は、一九〇九〜一三

第19表 羊毛の国別輸入比率（純輸入）

（単位：％）

	1821～1830 平 均	1841～1850 平 均	1861～1870 平 均	1881～1887 平 均
世界計 { (千トン)	20	62	193	434
{ (%)	100	100	100	100
イギリス	50	39	30	22
フランス	25	32	34	29
ドイツ	10	8	8	20
オーストリア	—	—	—	3
ベルギー	10	10	16	10
アメリカ	—	6	9	12

注. M. G. Mulhall, *op. cit.*, p. 600.

年には既に遠く植民地から来る商品になっていた。第一八表にみるように第一次輸出国は上位七カ国がすべてアメリカ、アフリカ、アジア、大洋州の国であり、そのシェアの合計は六四％であつた。しかし羊毛の輸出国は一九世紀の半ば頃までは、もっぱらヨーロッパ諸国であつた。イギリスの輸入先でみて、一八三〇年の輸入は殆どドイツからきた。しかし一八五〇年になると、輸入の半分以上が植民地からくるようになる。⁽¹¹⁾一方輸入国も一九〇九～一三年には、イギリスが三五％ではあるが、再輸出を差し引くとその比率はずっと小さくなり、フランス、ドイツと大差なくなる。第一九表で大ざっぱな輸入市場の変化がわかる。一八二〇年代に半分のシェアを占めていたイギリスは、四〇年代には四〇％を割り、八〇年代には二二％になっている。フランスは六〇年代既にイギリスを抜く輸入国であつた。イギリスのシェアは低下していたが、輸入市場は全体として西ヨーロッパに集中していた。

このように一九世紀中葉以降の農産物貿易の発展は、依然としてイギリスを最大の輸入中心としてはいたが、ドイツ、アメリカ、フランス等、品目によつてはイギリスをしのぎ、あるいはイギリスに迫るような輸入市場の発展を伴っていた。イギリスのシェアを品目別に追跡する資料はないが、既にみた若干のものを除いて、純輸入量の伸びを他の有力輸入国と比較してみると

次のようになる。一八六六―七〇年と一九〇九―一三年の間の伸び率。茶、イギリス二・七倍、ロシア四・九倍。砂糖、イギリス二・八倍、アメリカ五・七倍⁽¹²⁾。

輸出地域もかつてより大きく拡大し、新しい輸出地域が生み出された。この輸出地域の拡大は、交通革命によって遠隔地が世界市場に組み込まれたことではあるが、それはまた新しい交通条件の下での国際分業の再編成を意味していた。羊毛の輸出国がオーストラリア、ニュージーランド、アルゼンチンという広大な草原をもつ人口希薄な新開国へ移動したことは、需要の増大に伴う新供給国の開発ということだけではなく、資源賦与状態にもとづいた生産立地の再編成でもあった。牛肉の輸出の場合も同様である。しかし一方ではビート糖、豚肉、酪農製品のように、ヨーロッパの集約的農業に適する、あるいはそれが新開国の粗放的農業に対抗しうる部門では、ヨーロッパ内に輸出地域の発展もみられた。

これらの内容をもつ農産物貿易の発展は、何よりも需要の増加に主導されたものであることを強調しなければならぬ。交通革命はあくまでその技術的前提であって原因ではなかった。需要の増加は既に多くの例でみたように、イギリスに次いで急速に工業化しつつあるヨーロッパ、北米、さらにおくれて日本から来た。穀物は典型的である。穀物について西ヨーロッパはいまや、全体として輸入地域となり、その不足は東欧、新開国によってカバーされた。原料農産物も同様であり、綿花や羊毛は新開国や旧開農業国から、世界の工業センターへと流れ込んだ。多くの熱帯産品も多くの工業国に買手を見い出した。要するに農産物貿易の発展は、この時期の工業化がもたらしたものであったのである。

注(一) S. B. Saul, *Studies in British Overseas Trade, 1870-1914*, 1960, pp. 3-12. 堀・西村訳『世界貿易の構造とイギ

リス経済』二二二頁。

- (2) J. B. Condliffe, *The Commerce of Nations*, 1951, p. 293.
- (3) イギリスに輸入される小麦の運賃率は、一八六六～七〇年から一九〇一～〇五年にかけて、バルチック海からのものは三九%、黒海からのものは五一%。アメリカからのものは五五%それぞれ下落した (D. C. North, "Ocean Freight Rates.....", (*op. cit.*), p. 551).
- (4) P. Bairoch, "Agriculture and the Industrial Revolution", in C. M. Cipolla ed., *op. cit.*, Vol. III, pp. 476-477.
- (5) W. Ashworth, *op. cit.*, p. 29. 邦訳『前出』二〇頁。
- (6) R. M. Stern, "A Century of Food Exports", *Kyklos*, XIII, Fasc. I, 1960, pp. 58-60.
- (7) *ibid.*, p. 45.
- (8) *ibid.*, pp. 44-45.
- (9) L. B. Bacon & F. C. Schloemer, *op. cit.*, pp. 202, 208, 228.
- (10) *ibid.*, p. 349.
- (11) *ibid.*, p. 422.
- (12) イギリスの *Statistical Abstract for the U. K.* (*op. cit.*)¹⁾ アメリカの U. S. D. C., *Historical Statistics of the U. S.*, United States, Colonial Times to 1970, Part 2, (Bicentennial ed.), 1976, ロシアは農業総合研究所『世界農産物貿易統計集 (第一次大戦前)』(総合基礎資料第六集)²⁾ 一六頁による。なおアメリカの砂糖の一九〇九～一三年は第一表による。

四 世界農産物市場の地域構造

一九世紀前半の世界経済は、イギリスを唯一の工業国とし他を農業国とする体制Ⅱイギリス体制として描かれる。前述してきた一九世紀中葉以降の世界農産物市場は、工業国と農業国との関係という点ではイギリス体制に類

似していたが、工業国が複数化して多くの農業国と関係している点でイギリス体制の崩壊を示すものであった。この複数化した輸入国と輸出国との世界農産物市場での関係を、世界農産物市場の地域構造ということにしよう。

1 イギリス

第三〇表はイギリスの穀物輸入の国別の動向を示している。まずいえることはイギリスの穀物輸入が一八六〇年代後半から一九〇九一三年にかけて、約二九倍になっているということ、なかでは小麦ととうもろこしがその大部分を占めているということであろう。輸入先は六〇年代後半にはロシア、ルーマニアの東欧と、アメリカ、カナダの北米、ドイツが主たるところであったが、これらの合計は六一％であり、なお多くの輸入先があり、全体として分散していた。その他の輸入先はフランス、オーストリー・ハンガリー、トルコ、チリー等である。

八〇年代後半になると輸入先は、ドイツが脱落し、東欧、北米の比重がそれぞれ三五％に高まり、アルゼンチン、インド、オーストラリアが参加してくる。表示八カ国の全体で八三％を占め、六〇年代後半よりもずっと集中している。ことに小麦は九四％が八カ国から来た。また大麦、えん麦においてロシア、ルーマニアの比重は圧倒的に高まる。そして小麦では北米が過半を占めるようになる。

ところが一九〇九一三年になると、穀物の九四％がこの八カ国から来るようになり、この点での集中は強まるが、一方、ロシア、ルーマニアの比重が下がって二一％になり、北米の比重も下がり、アルゼンチン、インド、オーストラリアが著しく台頭する。北米のなかでもアメリカは比重のみならず絶対量も下がるが、カナダは絶対量も比重も共にのびているのである。なおロシア、ルーマニアは絶対量も低下している。これらの結果として、北米、

第20表 イギリスの穀物輸入

(単位:千トン, %)

輸 入 先	合 計	ドイツ	ルーマニア	ロシア	カナダ	アメリカ	アルゼンチン	インド	オーストラリア
一八六六〜七〇 小麦 イギリス とうもろこし 計	1,912 (100)	348 (18)	32 (2)	538 (28)	87 (5)	444 (23)	-	-	-
	375 (100)	81 (22)	11 (3)	60 (16)	-	10 (3)	-	-	-
	12 (100)	-	-	-	-	-	-	-	-
	458 (100)	40 (9)	-	159 (35)	28 (6)	8 (2)	-	-	-
一八八六〜九〇 小麦 イギリス とうもろこし 計	699 (100)	-	61 (9)	46 (7)	-	174 (25)	-	-	-
	3,456 (100)	469 (14)	104 (3)	803 (23)	115 (3)	636 (18)	-	-	-
	3,925 (100)	161 (4)	99 (3)	735 (19)	168 (4)	1,382 (48)	61 (2)	468 (12)	94 (2)
	847 (100)	68 (8)	130 (15)	413 (49)	-	13 (2)	-	-	-
一九〇九〜一三 小麦 イギリス とうもろこし 計	36 (100)	-	-	-	-	-	-	-	-
	766 (100)	16 (2)	-	569 (74)	12 (2)	26 (3)	-	-	-
	1,699 (100)	-	401 (24)	180 (11)	-	484 (28)	144 (8)	-	-
	7,273 (100)	245 (3)	630 (9)	1,897 (26)	180 (2)	2,405 (33)	205 (3)	468 (6)	94 (1)
一九〇九〜一三 小麦 イギリス とうもろこし 計	5,970 (100)	42 (1)	47 (1)	802 (13)	1,143 (19)	1,322 (22)	856 (14)	984 (16)	630 (11)
	1,087 (100)	19 (2)	124 (11)	360 (33)	37 (3)	137 (13)	5 (0)	130 (12)	1 (0)
	41 (100)	-	3 (7)	24 (59)	3 (7)	4 (10)	-	-	-
	915 (100)	123 (13)	30 (3)	292 (32)	73 (8)	38 (4)	286 (31)	-	2 (0)
小計	2,114 (100)	-	271 (13)	190 (9)	28 (1)	345 (16)	1,156 (55)	36 (2)	-
	10,127 (100)	183 (2)	474 (5)	1,668 (16)	1,283 (13)	1,847 (18)	2,303 (23)	1,151 (11)	633 (6)

注. 小麦は小麦粉 (1.333 倍して小麦換算) を含む. 1866〜1870年, 1886〜1890年は *Statistical Abstract for the U. K.*, (op. cit.) による, 1909〜1913年は I. I. A., *Annuaire International de Statistique Agricole, 1915 et 1916*, 1917, pp. 398-474 による.

第21表 イギリスの酪農製品の輸入先

(単位: %)

	バ タ ー			チ ー ズ		
	1884	1896~1900	1908~1912	1884	1896~1900	1908~1912
合 計(千トン)	126	165	212	98	125	120
ロ シ ア	1	5	15	0	-	-
スウェーデン	4	8	8	0	-	-
デンマーク	14	43	41	0	-	-
オランダ	45	8	4	17	13	11
フランス	21	12	8	1	2	1
カナダ	2	5	1	31	57	64
アメリカ	4	4	0	51	24	3
オーストラリア	0	7	14	0	0	0
ニュージーランド		3	7		2	17

注. H. M. S. O., *Annual Statement of the Trade of the U. K. with Foreign Countries and British Possessions*, 1884, 1900, 1912 による。

東欧、アルゼンチン、インド、オーストラリアの四地域が二、三〇%前後のシェアを占めるに至っている。つまり八カ国へと集中しながら、そのなかでは輸入先は再び分散しているのである。しかし全般的にいつてイギリスの穀物輸入先は、先にみた穀物輸出国の変遷を直接に反映して、旧輸出国から新輸出国へと推移しているといえる。つまりイギリスはその輸入量の大きさと、貿易上の地位の大きさのために、その輸入を世界的な広がりにおいて行っているのである。

酪農製品の輸入先は第二一表に示される。バターは輸入先は一八八四年にはオランダが四五%で、ついでフランスが二一%、デンマーク一四%であったが、一八九〇年代後半にはデンマークが四三%となってオランダが八%に落ち、フランスも一二%に下がり、オーストラリア、ニュージーランド、スウェーデンが台頭してくる。一九〇八―一二年においても、この傾向は続き、オーストラリア、ニュージーランドは二一%とデンマークに次ぐ輸入先となり、またロシアが一五%と大きくそのシェアを伸ばしている。しかしバターの場合、スウ

第22表 イギリスの肉類の輸入先

(単位：%)

	牛 肉 (生)			羊 肉 (生)		
	1884	1896~1900	1908~1912	1884	1896~1900	1908~1912
合 計(千トン)	45	170	347	26	108	253
オ ラ ン ダ	—	0	0	23	8	3
カ ナ ダ	3	1	0	—	—	—
ア メ リ カ	92	73	9	6	0	0
アルゼンチン	—	5	74	8	31	31
オーストラリア	—	16	9	13	19	22
ニュージーランド	—	4	5	48	41	40

注. 出所は第21表に同じ.

エーデン、デンマーク、オランダ、フランスといった西ヨーロッパの比重は、次第に下がりながらもなお六〇%を超えていた。

チーズの場合はバターと異なり、一八八四年にアメリカ、カナダの比重が八二%を占め、オランダが一七%と三カ国に集中していた。以後カナダが急激に伸び一九〇八〜一二年には六四%に達し、アメリカが急減して三%にまで下がり、ニュージーランドが一七%にまで伸びる。オランダの比重は次第に低下し、結局カナダ、ニュージーランドの二自治領へと集中することになる。つまりバターは西欧・ロシア型であり、チーズは新開植民地型であり、それぞれの内部でのシェアの異動が行われたわけである。そしてこういったイギリスの輸入動向は、第一一表でみた世界の輸出動向と軌を一にするものではあったが、若干の注目すべき点があった。それはバターにおいて四二%、チーズにおいて三四%（いずれも一九〇九〜一三年）を占めるオランダ、デンマーク以外のヨーロッパからの輸入が、イギリスでは相対的に少ないことである（ことにチーズ）。逆にイギリスの輸入はバターではデンマーク、オーストラリア、ニュージーランド、チーズにおいてはカナダ、ニュージーランドに片寄っていることであらう。

第23表 イギリスのベーコン、ハムの輸入先

(単位：%)

			ベーコン			ハム		
			1884	1896~1900	1908~1912	1884	1896~1900	1908~1912
合	計(千トン)		140	271	241	33	91	50
ロ	シ	ア	-	-	3	-	-	-
デ	ソ	マ	4	21	43	-	-	-
ド	イ	ツ	19	-	-	-	-	-
オ	ラ	ン	-	0	2	-	-	-
カ	ナ	ダ	6	8	11	11	8	6
ア	メ	リ	70	69	42	88	91	94

注. 出所は第21表に同じ.

牛肉の輸入先は一八八四年には九二%がアメリカであったが、それは急減してアルゼンチン、オーストラリア、ニュージーランドへと移行した。羊肉では一八八四年からニュージーランドが四八%を占め、次いでオーストラリア、アルゼンチン、アメリカの新開国も加わったが、オランダが二三%と第二位を占めていた。しかしオランダのシェアは急減し、アルゼンチン、オーストラリアが急増し、一九〇八〜一二年には全く、ニュージーランド、アルゼンチン、オーストラリアの三国へと集中している(第二二表)。オランダを除けばいずれも新開国内部での変化であった。そして強調すべきことは、牛肉も羊肉も輸入量自体は急速に伸びており、シェアの減少は絶対量の減少を意味するものではないことである。増加する輸入需要がもつぱら、前述したシェアの増加した地域でまかなわれたのである。

ベーコンとハムの輸入は八〇年代から九〇年代にかけては急増したが、二〇世紀に入ると減少している。ベーコンの場合、主たる輸入先はアメリカ、ドイツからデンマーク、アメリカ、カナダへと移った。ハムの輸入先はアメリカ、カナダがすべてであり、その内部でアメリカへと集中していた(第二三表)。ベーコンはデンマーク、北米型、ハムは北

第24表 イギリスの砂糖の輸入先 (単位：%)

	1884	1896~1900	1908~1912
合計(千トン)	1,213	1,570	1,783
ド イ ツ	33	51	38
オ ラ ン ダ	7	8	15
オ バ ル ギ ー	2	7	4
フ ラ ン ス	5	18	3
オーストリー・ハンガリー	—	1	16
英領西インド	6	2	1
英領ギアナ	8	2	—
ブ ラ ジ ル	6	1	2
ペ ル ー	2	2	3
英領インド	4	3	2
ジ ャ バ ン	14	2	8
フ ィ リ ピ ン	3	2	—

注. 精糖, 粗糖の合計をとる. 出所は第21表に同じ.

米型ということが出来る。

イギリスの砂糖の輸入先は分散していた(第二四表)。イギリスの砂糖は古くは西インド諸島の甘蔗糖に依存していたが、一九世紀の中頃から、ヨーロッパ大陸のビート糖が輸入されるようになり、両者は一八八四年にはほぼ拮抗していた。そのうちドイツがちょうど三分の一を占める最大の輸入先であった。九〇年代後半にはこのドイツの比重は五一%に達し、フランス、オランダ、ベルギー、オーストリー・ハンガリーを合わせて、ヨーロッパからの輸入が八五%に達する。このことはビート糖が甘蔗糖を大きく抜いたことでもあった。以後一二年間でドイツの

シェアは落ちるが、オランダ、オーストリー・ハンガリーの台頭によって、ヨーロッパのビート糖のシェアは依然として七六%になっている。これを第一五表でみる一九〇九と一三年の砂糖輸出の地域別比重と比べると、ヨーロッパのビート糖の輸出比率は三七%であり、イギリスの砂糖輸入がヨーロッパのビート糖に大きく片寄っていることがわかる。ことにドイツとの関係が特別であった。

茶の場合、その輸入先はインド、セイロン、中国に集中していた(第二五表)。しかし一八八四年には六七%を占めていた中国が十数年後には一〇%にまで急落し、代わってインド、セイロンが急速に伸びて一八九〇年代後半には

第 25 表 イギリスの茶の輸入先 (単位: %)

	1884	1896~1900	1908~1912
合 計 (トン)	97,015	126,247	154,678
イ ン ド	30	50	54
セ イ ロ ン	1	36	33
中 国	67	10	6
ジ ヤ ワ	1	-	5

注. 出所は第21表に同じ.

第 26 表 イギリスの綿花, 羊毛の輸入先 (単位: %)

		1866~1870 平 均	1886~1890 平 均	1908~1912 平 均
綿 花	合 計(千トン)	592	814	1,019
	エ ジ ブ ト	10	10	17
	ア メ リ カ	43	74	76
	イ ン ド	37	13	3
羊 毛	合 計(千トン)	113	286	358
	オーストラリア	59	65	39
	ニュージランド			22
	英 領 イ ン ド	7	5	6
	南 ア フ リ カ	14	12	14
	フ ラ ン ス	-	2	3
	ド イ ツ	3	1	0
	ロ シ ア	-	5	1
	ト ル コ	-	3	1
	チ リ ー	-	-	3
	アルゼンチン	-	-	6

注. 1866~1870, 1886~1890年については第20表,
1908~1912年については第21表に同じ.

二六表に示す。綿花については比較的变化は少ない。一八六〇年代後半のアメリカの比重の低さとインドの比重の高さは、南北戦争の後遺症であり、綿花の供給源は一貫してアメリカが圧倒的であり、わずかにエジプトが増加してインドが減少したのみである。そしてかかる性格は、第一七表にみた輸出国のシエアと、ほぼ一致するものであった。

羊毛の場合も同様に輸入先の大きな変化はみられない。輸入量は六〇年代後半から一九〇八、一二年の間に、三倍以上の増加を示しているのに、輸入先の比重はオーストラリア、ニュージランドが六〇%の前後であり、南ア

両者合わせて八六%に、一九〇八、一二年には八七%にまで達する。つまり中国から、南アジアの植民地への輸入先の転換が顕著であった。最後に繊維原料の輸入先を第

リカが一二〜一四%、英領インドが五〜七%でこれらの国々ではほぼ八〇%を占めている。この間に若干目立つのは、アルゼンチンの台頭であろう。しかしその比重は六%どまりであった。この輸入状況を第一八表の輸出国のシェアとくらべると、イギリスはオーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、つまり植民地への依存が相対的に大きいことがわかる。

イギリスの農産物輸入の性格を特徴づけると次のようにまとめることが出来る。イギリスは穀物の場合のように、世界農産物貿易が発展するに伴って、その輸入先を次第に全世界的に拡大する傾向を持っていた。それは多くの農産物の場合、新開国への依存の強化を意味していた。とくにイギリスの場合、植民地たるカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、英領インド、南アフリカ、セイロンへの依存度が相対的に高まる傾向を示していた。しかし一方、砂糖のようにヨーロッパ大陸への依存が高まった商品もあった。バター、ベーコンにおけるデンマークのように、ヨーロッパ内での強い結びつきの台頭もみられた。

2 ドイツ

イギリスに次ぐヨーロッパの農産物輸入国であったドイツの場合をみてみよう。第二七表にみるようにドイツの穀物輸入は、一九〇九〜一三年平均で七七〇万トンでイギリスの七六%に達する。もっともドイツは同時に穀物輸出も多いから、それを差し引いた純輸入ではほぼ半分程度である。このドイツの輸入は一八八〇年代後半から第一次大戦直前にかけて、ほぼ三倍に伸びた。しかしその主要な供給国は一貫してロシアであり六〇%前後を占めていた。これにルーマニア、オーストリー・ハンガリー（ハンガリーを中心とするバルカン領域とみてよい）を加える

第27表 ドイツの穀物輸入

(単位：千ト、%)

輸 入 先	合 計	ロ ッ プ	ルーマニア	オーストリー・ハンガリー	カナダ	アメリカ	アルゼンチン
一八八六～一九〇平均	小麦 716 (100) 大麦 539 (100) ライ麦 828 (100) えん麦 216 (100) とうもろこし 281 (100) 計 2,580 (100)	465 (65) 183 (34) 640 (77) 181 (84) 38 (14) 1,507 (58)	26 (4) 22 (4) 15 (2) 0 (0) 24 (9) 87 (3)	113 (16) 259 (48) 7 (1) 12 (6) 18 (6) 409 (16)	- (-) 0 (0) 0 (0) - (-) - (-) 0 (0)	23 (3) 1 (0) 6 (1) 1 (0) 130 (46) 161 (6)	2 (0) 0 (0) 0 (0) - (1) 4 (1) 6 (0)
一九〇九～一三平均	小麦 2,622 (100) 大麦 3,083 (100) ライ麦 404 (100) えん麦 672 (100) とうもろこし 911 (100) 計 7,692 (100)	1,073 (41) 2,663 (86) 361 (89) 480 (71) 162 (18) 4,739 (62)	201 (8) 83 (3) 27 (7) 25 (4) 121 (13) 457 (6)	2 (0) 135 (4) 0 (0) 0 (0) 5 (1) 142 (2)	179 (7) 1 (0) - (-) 3 (0) - (-) 183 (2)	481 (18) 40 (1) 5 (1) 33 (5) 152 (17) 711 (9)	492 (19) 6 (0) 4 (1) 124 (18) 393 (43) 1,019 (13)

注：総輸入 (Gesamteigenhandel) である。なお、1886～1890年については Einfuhr über die Zollgrenze をとる。小麦は小麦粉を含まないが、小麦粉輸入は無視しうる。出所は *Statistik des Deutschen Reichs* により、農業総合研究所、前出、41-50頁より引用、計算。

なら、その依存度は七〇～八〇%に達している。のこりはアメリカとアルゼンチンであった。

ロシアへの依存は八〇年代後半には小麦、ライ麦、えん麦で著しかったが、第一次大戦前には、小麦はアメリカ、カナダ、アルゼンチンが多くなり、大麦、ライ麦、えん麦が強くロシアに依存していた。ことに大麦はその輸入の伸びがもっとも著しく、しかもまたロシアのシェアは九〇%に近づいていた。このようにドイツは八〇年代後

半以降の急増する穀物需要を、もっぱらロシア・東欧からの輸入増によってカバーしたのである。

ところでドイツの穀物貿易の特徴は、基本的には輸入国であるのに、輸出もまたかなりの数量に達していることである。第二八表でみるように一九〇九〜一三年平均で一九四万トンの穀物輸出があり、それは輸入量の二五%にあたるものである。ことにライ麦はドイツは差し引き四〇万トンの輸出国であり、えん麦も輸出入の差は一五万ト

第28表 ドイツの穀物輸出

(単位：千トン、%)

輸 出 先	合 計	ベルギー	デンマーク	フランス	イギリス	ロシア	オランダ	スウェーデン	スイス
一八八六〜九〇平均	227 (100)	9 (4)	27 (12)	5 (2)	98 (43)	- (-)	5 (2)	19 (8)	52 (23)
小麦	65 (100)	1 (2)	1 (2)	1 (2)	27 (42)	3 (5)	9 (14)	1 (2)	2 (3)
ライ麦	61 (100)	0 (0)	10 (16)	1 (2)	6 (10)	1 (2)	2 (3)	9 (15)	1 (2)
えん麦	43 (100)	3 (7)	2 (5)	1 (2)	13 (30)	- (-)	0 (0)	- (-)	12 (28)
とうもろこし	8 (100)	- (-)	- (-)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	- (-)	- (-)	6 (75)
計	404 (100)	13 (3)	40 (10)	8 (2)	144 (36)	4 (1)	16 (4)	29 (7)	73 (18)
一九〇九〜一三平均	513 (100)	38 (7)	34 (7)	107 (21)	13 (3)	11 (2)	44 (9)	27 (5)	180 (35)
小麦	34 (100)	2 (6)	0 (0)	- (-)	5 (18)	9 (26)	6 (18)	- (-)	8 (24)
ライ麦	805 (100)	59 (7)	145 (18)	38 (5)	9 (1)	150 (19)	141 (18)	59 (7)	15 (2)
えん麦	527 (100)	22 (4)	69 (13)	39 (7)	120 (23)	17 (3)	68 (13)	48 (9)	128 (24)
とうもろこし	57 (100)	1 (2)	8 (14)	- (-)	- (-)	- (-)	0 (0)	0 (0)	44 (77)
計	1,936 (100)	122 (6)	256 (13)	184 (10)	148 (8)	187 (10)	259 (13)	134 (7)	375 (19)

注. 総輸出である。但し1886〜1900年については Ausfuhr über die Zollgrenze をとる。小麦には小麦粉を含まない。出所は第27表に同じ。

第 29 表 ドイツの畜産物の輸入先

(単位：%)

	バ タ ー		チ ー ズ		肉 類	
	1888	1911~1913 平 均	1888	1911~1913 平 均	1888	1911~1913 平 均
合 計(千トン)	5.2	55.3	5.5	0.8	4.1	45.5
ロ シ ア	34	52	-	-	17	12
ス ウ ェー デ ン	-	0	-	-	-	7
デ ン マー ク	-	9	-	-	-	42
オーストリー・ ハンガリー	45	0	2	4	5	-
ス イ ス	-	0	57	55	-	-
オ ラ ン ダ	9	30	21	-	12	27
フ ラ ン ス	5	0	8	32	-	3
ア メ リ カ	-	-	-	-	10	2

注. 純輸入である。肉類は牛, 豚, 羊の合計。1911~1913年では牛肉が2/3である。

Statistik des Deutschen Reichs, Neue Folge, Band 40 および 270 による。

ンの入超にすぎなかった。小麦でさえも二六二万トンの輸入に
対し五一万トンの輸出があったのである。完全な輸入品目は大
麦ととうもろこしにすぎなかった。ドイツの輸出は八〇年代後
半に比して、第一次大戦前にはむしろ五倍近くに伸びていた。
つまり輸入の増加以上に輸出がふえているのである。

ドイツの穀物輸出は主として東エルベのユンカー地帯からの
伝統的なものであった。そしてまた西ドイツには輸入が行われ
た。また東プロイセンのバルト海諸港は、ロシアからの穀物を
輸入してドイツの穀物とまぜて輸出したりしていた。この意味
については別に取り上げるとして、ドイツ穀物の輸出先は第二
八表にみるように、西ヨーロッパ諸国であった。八〇年代後半
はイギリスへの小麦が多かったが、そしてスイスが一貫して有
力な輸出先であったが、大体において各国に分散していた。こ
とにライ麦は多分に特産物的な性格をもって、西ヨーロッパ各
国へ、さらにはロシアにまで輸出されていた。その点ライ麦輸
出は作りやすいものを作って輸出し、不足するものを輸入する
という面をもっていた。かくてドイツはロシア・東欧より穀

第30表 ドイツの砂糖の輸出先 (単位: %)

	1886~1890平均	1909~1913平均
合 計(千トン)	606	797
イ ギ リ ス	57	70
オ ラ ン ダ	8	2
ノールウエイ	0	5
スウェーデン	3	0
ス イ ス	2	4
アルゼンチン	0	3
チ リ ー	0	1
ウルグアイ	0	2
ア メ リ カ	3	1
不 明	24	-

注. 純輸出 (Spezialhandel) である。1886~1990年の不明とはドイツ関税国境外区域とされているものである。出所は第27表に同じ(36頁)。

物を輸入し、一部その再輸出をも含めてドイツの穀物を西ヨーロッパに輸出するという構造をもっていた。しかし差し引きでいうならドイツは大輸入国であり、その輸入先はもっぱらロシア・東欧だったのである。

ドイツの畜産物輸入は量的にいつて、イギリスに比して問題にならなかった。大戦前で肉が一〇分の一、バターが四分の一、チーズは一五分の一であった。もとも一八八八年にはチーズはもつと多かった(第二九表)。バターと肉類の輸入は一八八八年から一九一一一三年にかけて一〇倍に伸びてはいるが、なおこの水準であった。これはまた前述したように畜産物輸入におけるイギリスの位置が、余りにも大きかったことをも示している。ところ

で輸入先についてはバターがロシア、オランダ、チーズがスイス、フランス、肉がデンマーク、オランダ、ロシアと、ヨーロッパ大陸諸国に依存している点でイギリスと異なっていた。つまりドイツの畜産物輸入は量的に小さいせいもあって、ヨーロッパ内のローカルな貿易にとどまっていた。

ドイツは砂糖については輸出国であり、それはドイツの輸出にとつても、世界の砂糖貿易にとつてもけつして小さなものではなかった。砂糖の輸出先はもっぱらイギリスであった(一八八六~九〇年も行先不明となっている分も多くはイギリスへ行つたと思われる)。砂糖はドイツ・イギリス間貿易の重要商品であった(第三〇表)。

第31表 ドイツの綿花の輸入先 (単位：%)

	1886~1890平均	1909~1913平均
合 計(千トン)	215	458
ベルギー	18	-
イギリス	4	0
ギリシア	10	0
オランダ	4	0
英領インド	13	13
アメリカ	39	77
エジプト	1	9

注. 純輸入をとる.

出所は第27表に同じ(58頁).

第32表 ドイツの羊毛の輸入先 (単位：%)

	1886~1890平均	1909~1913平均
合 計(千トン)	124	202
ベルギー	22	6
フランス	4	3
イギリス	24	2
オーストリー・ ハンガリー	4	1
アルゼンチン	24	28
オーストラリア	9	39
ニュージーランド	-	1
英領南アフリカ	-	12

注. 純輸入をとる. - は記載なしを意味する.

出所は第27表に同じ(60頁).

繼地であろう)。ドイツの綿花輸入の構造はイギリスと大差ない。羊毛の輸入先についてもイギリスと大差ないが、ニュージーランドの比重が小さく、その代わりアルゼンチンの比重が大きい。

ドイツの農産物貿易の性格は次のように要約出来る。ドイツは最大の輸入品目たる穀物において、主としてロシア・東欧に依存していた。また一方、一部の穀物を西ヨーロッパ諸国へと輸出していた。畜産物についてドイツは、ヨーロッパ大陸諸国との間で小さな輸入貿易を行っていた。ドイツは砂糖の輸出によって、イギリスとの間に強い関係を持っていた。綿花、羊毛の輸入は大きかったが、その輸入先は主として新開国であり、世界の輸出情況

ドイツの綿花、羊毛の輸入先は第三一、三二表に示される。八〇年代後半には綿花の輸入先は分散しているようにみえるが、ベルギー、オランダ、イギリスはアメリカ綿の再輸出とみてよいから、實質アメリカの比重は六五%以上であろう(ギリシアもまた他の綿花の中

と対応するもので特別な性格のものではなかった。

3 フランス

フランスは基本的に農産物について自給的な国であり、穀物輸入量はイギリスの五分の一度程度であった。しかし第三三表にみるように、その輸入量は一八六〇年代後半の六三万トンから一八八〇年代後半の一八三万トン、第一次大戦前の二一〇万トンへと増加していた。輸入の半分は小麦であり、次いでとうもろこし、えん麦であった。六〇年代以後は輸入先は分散していたが第一位はロシア、次がドイツであった。八〇年代後半になると輸入先は集中はじめ、ロシア、ルーマニアが四〇%、アメリカが二一%、アルジェリア一%、アルゼンチン八%が主なところで計八〇%に達した。第一次大戦前にはロシアの比重、絶対量は下がるが、またアメリカも大きく減少するが、代わってアルゼンチン、アルジェリア、オーストラリア、チュニジアが台頭してくる。しかし全体としてフランスの輸入先はドイツと違ってかなり分散していた。イギリスと比べればロシア・東欧の比重が高く、アメリカ、カナダの比重が低かった。そしてアルジェリア、チュニジアといった植民地からの輸入が特色である。

フランスの砂糖輸入はイギリスの一〇分の一にすぎない。その輸入先は六〇年代後半のスペイン領アフリカ、八〇年代後半のオランダ領東インドを除けば殆ど三つの植民地へ集中していた。そして輸入は殆ど甘蔗糖であった（第三四表）。

綿花は他の国と同じように、主としてアメリカからきた。六〇年代後半のイギリスからの輸入は、すべてアメリカ綿花の再輸入とみられるから、アメリカの比重は六〇%に達していたといつてよい。インド、エジプトについて

第33表 フランスの穀物輸入(純輸入)

(単位:千トン, %)

輸 入 先	合 計	ロ シ ア	ルーマニア	チェコシヅ	ポ イ ツ	アメリカ	オーストラリア	アフリカ	アジア
一八六六と七〇平均	小麦 373 (100) 大麦 44 (100) ライ麦 4 (100) えん麦 171 (100) とうもろこし 36 (100) 計 628 (100)	97 (26) 4 (9) - 32 (19) 3 (8) 136 (22)	- - - - - -	- - - - - -	52 (14) 8 (18) - 35 (20) - 95 (15)	8 (2) - - - - 8 (1)	- - - - - -	- - - - - -	2 (1) 4 (9) - 4 (2) - 8 (1)
一八八六と九〇平均	小麦 988 (100) 大麦 137 (100) ライ麦 18 (100) えん麦 221 (100) とうもろこし 467 (100) 計 1,831 (100)	293 (30) 49 (36) 9 (50) 105 (48) 72 (15) 528 (29)	81 (8) 7 (5) 4 (22) 3 (4) 103 (22) 203 (11)	7 (1) - - - - 7 (0)	5 (1) 1 (1) 2 (11) - - 8 (0)	246 (25) - - 9 (4) 134 (29) 389 (21)	49 (5) - - - - 49 (3)	12 (1) - - - 126 (27) 138 (8)	111 (11) 56 (41) - 30 (14) - 197 (11)
一九〇九と二三平均	小麦 1,039 (100) 大麦 138 (100) ライ麦 53 (100) えん麦 397 (100) とうもろこし 475 (100) 計 2,102 (100)	134 (13) 15 (11) 8 (15) 139 (35) 60 (13) 356 (17)	156 (15) 11 (8) 7 (13) 14 (4) 93 (20) 281 (13)	23 (2) 37 (27) - 44 (11) - 104 (5)	108 (10) - 36 (68) 39 (10) - 183 (9)	69 (7) - 1 (2) 5 (1) 16 (3) 91 (4)	144 (14) - - - - 144 (7)	156 (15) - - 53 (13) 198 (42) 407 (19)	132 (13) 67 (49) - 60 (15) - 259 (12)

注. 純輸入との開きが大きいので純輸入(special=輸入中国内消費に向けられたもの)をとる。
出所は、農業総合研究所、前出、101-109頁による(数字の誤りは訂正した)。

第34表 フランスの粗糖の輸入先

(単位：%)

	1866~1870 平 均	1886~1890 平 均	1909~1913 平 均
合 計(千トン)	187	164	153
ベ ル ギ ー	10	0	3
イ ギ リ ス 領 ア フ リ カ	3	0	2
ブ ラ ジ ル	4	0	-
ス ペ イ ン 領 ア フ リ カ	28	0	-
オ イ ラ ン ダ 領 イ ン ド	-	30	10
キ ュ ー バ	-	-	7
植 民 地 計	50	68	73
ガ ド ル ー プ	15	27	23
マルチニツク	15	20	25
レユニオン島	19	20	25

注. 純輸入 (spécial) をとる. 精糖は含まないが量は少ない. 資料の出所は第33表に同じ(116頁).

第35表 フランスの綿花の輸入先

(単位：%)

	1866~1870 平 均	1886~1890 平 均	1909~1913 平 均
合 計(千トン)	113	141	311
イ ギ リ ス	19	4	2
ト ル コ	8	1	0
エ ジ プ ト	6	7	8
イ ギ リ ス 領 イ ン ド	16	19	7
ア メ リ カ	42	65	78
ブ ラ ジ ル	4	0	0

注. 純輸入 (spécial) である.
出所は第33表に同じ(119頁).

はイギリス、ドイツと同様な程度に依存していた(第三五表)。
羊毛についてはフランスは、イギリスに次ぎ、ドイツをしのぐ大輸入国であった前掲(第一八表)。輸入量は六〇年代後半から第一次大戦前にかけて三倍近くに伸びたが、それはイギリスと同じように、新開国からの輸入によってまかなわれた。イギリスからの輸入がかなりの比重を占めるが、この殆どは再輸入であり、原産はやはり新開国とみてよい(第三六表)。

このようにフランスの農産物輸入は、その量的な少なさもあって特色が少なく、輸入先は分散していた。しかし

第36表 フランスの羊毛の輸入先

(単位: %)

	1866~1870 平 均	1886~1890 平 均	1909~1913 平 均
合 計(千トン)	97	178	272
バ ル ギ ー	7	20	0
イ ギ リ ス	32	21	14
ス パ イ ン	2	2	4
ウ ル グ ア イ	9	5	8
リオ・デ・ラ・ プラタ	22	—	—
アルジェリア	5	4	3
オーストラリア	—	1	31
アルゼンチン	—	33	31

注. 純輸入 (spécial) である。

出所は第33表に同じ(121頁)。

砂糖のように三植民地へ集中しているものもあったし、全般的に植民地への若干の片寄りを示していた。この点、イギリスとやや似た点であり、ドイツとの差をなしていた。

100

4 ロシア

輸出国の側からその農産物貿易の地域的構造をみてみよう。ロシアの穀物輸出先は第三七表にみる通りである。一九〇九〜一三年平均一〇四六万トンに達するロシアの穀物輸出は、ドイツ、オランダ、イギリス、イタリア、フランスへと送られた。オランダのかなりの部分は通過貿易であり、ドイツを最終の輸入国としていたと思われるから、ドイツの比重はもっと高かったとみられる。

ロシアの穀物輸出は、第一次大戦前にはドイツと強く結びついていたのである。とくに大麦においてドイツの比重は、オランダ経由を考えなくとも五九%に達していた。ドイツの側からもそうであったように、ロシアとドイツの間には、穀物貿易において相互に強い依存関係が存在していた。

しかしこのような対ドイツ関係は八〇年代後半まではみられなかった。八〇年代後半まではロシアにとって、最大の輸出先はイギリスであり、八〇年代後半に四三%、六〇年代後半には五六%がイギリスに輸出されていた。ドイツは八〇年代後半で一二%であり、ドイツの側からみたロシア依存度五八%と対照的であった。当時のドイツの

第37表 ロシアの穀物輸出

(単位:千トン,%)

輸 出 先	合 計	イギリス	ドイツ	フランス	オランダ	イタリア	ギリシャ
一八六六〜七〇平均	小麦 1,156 (100) 大麦 108 (100) ライ麦 299 (100) とうもろこし 214 (100) 計 49 (100)	650 (56) 67 (62) 115 (38) 156 (73) 42 (86)	70 (6) 8 (7) 124 (41) 24 (11) -	240 (21) 5 (5) 2 (1) 21 (10) 3 (6)	1 (0) 16 (15) 19 (6) 3 (1) -	84 (7) 0 (0) 1 (0) 2 (1) -	12 (1) - 0 (0) 0 (0) -
一八六六〜九〇平均	小麦 2,667 (100) 大麦 1,009 (100) ライ麦 1,351 (100) とうもろこし 1,002 (100) 計 423 (100)	1,134 (43) 519 (51) 380 (28) 546 (54) 214 (51)	203 (8) 117 (12) 318 (24) 121 (12) 23 (5)	317 (12) 27 (3) 12 (1) 86 (9) 51 (12)	189 (7) 130 (13) 234 (17) 108 (11) 20 (5)	362 (14) 13 (1) 12 (1) 10 (1) 5 (1)	120 (4) 9 (1) 1 (0) - (-) 5 (1)
一九〇九〜一三平均	小麦 4,239 (100) 大麦 3,718 (100) ライ麦 655 (100) とうもろこし 1,088 (100) 計 763 (100)	774 (18) 360 (10) 48 (7) 295 (27) 140 (18)	355 (8) 2,193 (59) 152 (23) 176 (16) 97 (13)	510 (12) 27 (1) 8 (1) 140 (13) 53 (7)	943 (22) 679 (18) 273 (42) 331 (30) 161 (21)	865 (20) 14 (0) 7 (1) 13 (1) 9 (1)	170 (4) 6 (0) 0 (0) 0 (0) 1 (0)

注. 小麦は小麦粉を含まず. 出所は農業総合研究所, 前出, 3-8頁.

最大の輸入穀物たるライ麦は、七七%がロシアから来たが、それはロシアのライ麦輸出の二四%にすぎなかった（もっともこの両者の数字、つまりロシアの対ドイツ輸出三二万トン、ドイツの対ロシア輸入六四万トンとは大差がある。これはドイツの再輸出とオランダ経由の輸入のためであろう。このことは全穀物についてもいえる）。

六〇年代後半から八〇年代後半の間のロシアの穀物輸出の増加分四六三万トンのうち五五万トン、オランダの分をすべて加えても一二〇万トンがドイツに吸収されたのに対し、八〇年代後半から第一次大戦前の間の四〇一万トンの穀物輸出増加分中の二二〇万トン、オランダを加えると三九〇万トンがドイツに吸収された。一方この間、イギリスへの輸出は一一八万トン減少したのである。フランス輸出も二五万トン増加したが、イタリー、ギリシア輸出は殆どふえなかった。つまりこの間のロシアの輸出は、ドイツに向かって集中して行つたのである。とくにそれは前述したように大麦において顕著であつた。

ロシアの穀物輸出の始まりは古く一八世紀にさか上る。一八二〇年代すでにロシアは二四万トンの麦類をヨーロッパ・ロシアから輸出し、ナポレオン戦後のヨーロッパに「農業危機」(シスモンディ)⁽²⁾をつくり出した。四〇年代のロシアの麦類輸出は六〇万トン（うち小麦四二万トン）に達し、イギリスが主要市場となつた。ロシアの輸出は南部、南西部から黒海経由でヨーロッパへと来た。六〇年代の農奴解放と南ロシアの鉄道の拡張が、生産の増加と輸出の増加とをもたらした⁽³⁾。

ロシアの小麦は二つの品質から、つまりデュラム小麦と通常の硬質小麦からなり、それはいずれも西ヨーロッパ諸国に不足するものであつた。当初イギリスに向けられたのは硬質小麦であり、それはアメリカ小麦との競争にさらされた。七〇年代以降コスト面でも品質面でもロシア小麦はアメリカ小麦に敗れる。イギリスに代わつてドイツ

第38表 ロシアの茶の輸入先 (単位：%)

	1866~1870 平 均	1886~1890 平 均	1909~1913 平 均
合 計(千トン)	15	33	71
イギリス	14	11	1
ドイツ	42	5	0
中国	43	76	67
東インド	-	-	13

注. 出所は第37表に同じ(16頁).

が、八〇年代以降ロシア小麦の主要市場となった。地理的關係からロシアはドイツ小麦市場では優位に立った。ドイツにおける競争相手は九〇年代以前にはハンガリーであったが、ハンガリーの輸出はオーストリーの需要に吸収されるようになる。このドイツ市場におけるロシア小麦の優位は続くが、大戦前にはアルゼンチン小麦の競争とロシア自身のドイツへの飼料用大麦の輸出の急増によっておびやかされる。つまりドイツ向け小麦生産地帯が大麦へと転換するからである。イタリー、南フランス、ギリシア、スペインの南欧の需要はデュラム小麦に向けられていた。その点、同じロシア小麦でも別の市場をなしていた。⁽⁴⁾

ロシアは穀物以外に砂糖、卵、バター、亜麻の輸出国であった。砂糖は一九〇九と一三年平均二七万トンの輸出があり、ペルシア(二九%)、トルコ(二五%)、イギリス(二七%)、フィンランド(二〇%)を主要な市場としていた。⁽³⁾ 卵は一八九〇年代から大戦前までに五倍に、バターは大戦前一五年間で七、八倍に増加し、⁽⁶⁾ ドイツを主とする西ヨーロッパに輸出された。⁽⁷⁾

ロシアの主要な輸入農産物は、茶、綿花、羊毛である。ロシアは茶の有力な輸入国であったが、第三八表にみるように六〇年代後半には、イギリス、ドイツからの中継輸入と、中国に依存していた。しかし八〇年代後半、第一次大戦前になると中国が支配的となり、東インドが第二位となる。この点、インド、セイロン依存のイギリスと対照的であった。

ロシアの綿花輸入はイギリスの五分の一以下にすぎない。その輸入先は六〇年代

第39表 ロシアの綿花輸入先 (単位: %)

	1866~1870 平 均	1886~1890 平 均	1909~1913 平 均
合 計(千トン)	48	148	192
イ ギ リ ス	41	19	10
ド イ ツ	41	13	19
ア メ リ カ	3	41	43
ブ ラ ジ ル	1	2	-
ペ ル シ ア	7	1	13
エ ジ プ ト	-	13	4

注. 出所は第37表と同じ(17頁).

第40表 ロシアの羊毛の輸入先 (単位: %)

	1866~1870 平 均	1886~1890 平 均	1909~1913 平 均
合 計(トン)	1,989	5,091	48,162
イ ギ リ ス	13	16	7
ド イ ツ	24	34	29
フ ラ ン ス	0	1	29
ベ ル ギ ー	8	5	3
ペ ル シ ア	1	9	4
アフガニスタン	-	-	4
中 国	1	1	18

注. 出所は第37表に同じ(18頁).

アの場合の特色は、ペルシア、中国といった輸入先がかなりの比重を占めていることである(第四〇表)。

ロシアの場合、穀物輸出は農産物輸出に圧倒的な位置を占め続けた。大戦前夜にバター、卵、亜麻の合計は、穀物輸出額の三分の一になったが、穀物の圧倒的優位は変わらない。その輸出は当初イギリスへと集中していたが次いで西ヨーロッパ各諸国へと広がり、さらに九〇年代以降、急速にドイツへと集中した。それはとくに飼料用大麦の対ドイツ輸出によるところが大きい。いずれにせよロシアはドイツとの特別な関係を作り上げた。穀物以外の面については、ロシアは世界農産物市場に大した位置を占めていなかった(第一次大戦前のバターは例外)。ただそ

後半、さらにはそれ以後のイギリス、ドイツからの中継輸入の大部分も、アメリカ綿花であるとみてよいから、一貫して七〇〜八〇%がアメリカから来ている(第三九表)。

羊毛の場合、その輸入量はイギリスの八分の一にすぎなかった。輸入先はイギリス、ドイツ、フランスを主とするが、これは大部分中継貿易を意味しており、原産地は他の国々と同じく新開輸出国であろう。ロシ

の輸出入において、中近東、中国との地理的位置からくる特別な関係が目立っていた。

5 アメリカ

アメリカはそもそもヨーロッパの工業化と密接に関連しながら発展した新開国であった。アメリカ貿易の特徴はすでに述べたが、アメリカのイギリスとの強い結びつきは、八〇年代以降弱まっていた。第四一、四二表でアメリカの穀物、綿花の輸出先をみると、穀物については八〇年代後半は、六〇年代後半と同じくらい対英依存が大き

第41表 アメリカの穀物輸出

(単位:千トン, %)

輸 出 先	合 計	イギリス	ドイツ	フランス	ベルギー	オランダ	カナダ	西インド	キューバ
1866 小 麦	726 (100)	385 (53)	2 (0)	7 (1)	1 (0)	-	154 (21)	36 (5)	11 (2)
1870 とちもちこし	244 (100)	178 (73)	1 (0)	0 (0)	- (0)	-	51 (21)	4 (2)	3 (1)
平均 計	970 (100)	563 (58)	3 (0)	7 (1)	1 (0)	-	205 (21)	40 (4)	14 (1)
1886 小 麦	3,081 (100)	1,938 (63)	11 (0)	203 (7)	160 (5)	59 (2)	169 (5)	54 (2)	29 (1)
1890 とちもちこし	1,523 (100)	874 (57)	122 (8)	132 (9)	66 (4)	46 (3)	160 (11)	8 (1)	7 (0)
平均 計	4,604 (100)	2,812 (61)	133 (3)	335 (7)	226 (5)	105 (2)	329 (7)	62 (1)	36 (1)
1909 小 麦	2,686 (100)	933 (35)	186 (7)	72 (3)	282 (10)	155 (6)	39 (1)	62 (2)	101 (4)
1913 とちもちこし	1,133 (100)	351 (31)	154 (14)	16 (1)	45 (4)	154 (14)	214 (19)	7 (1)	42 (4)
平均 計	3,819 (100)	1,284 (34)	340 (9)	88 (2)	327 (9)	309 (8)	253 (7)	69 (2)	143 (4)

注: 小麦には小麦粉(換算済み)を含む。出所は U.S.D.C., *Statistical Abstract of the U.S.* (1878, 1892), *Commerce and Navigation of the U.S.* (1913). 農業総合研究所, 前出, 127-128頁より引用。

第42表 アメリカの綿花輸出先 (単位: %)

		1866~1870 平均	1886~1890 平均	1909~1913 平均
合	計(千トン)	336	1,030	1,976
イ	ス	73	61	40
ド	イ	8	14	28
フ	ン	15	9	12
イ	リ	1	2	6
ベ	タ	0	3	2
オ	ル	0	1	0
ス	ギ	2	4	3
ロ	ン	1	4	1
日	イ	-	-	3
カ	シ	0	1	2
	ア			
	本			
	ダ			

注. U. S. D. C., *Statistical Abstract of the U. S.* (1878, 1892), *Commerce and Navigation of the U. S.* (1913). 農業総合研究所, 前出, 129頁より引用。

いが、第一次大戦前には大幅に落ちて三分の一のシェアになってゐる。六〇年代後半の場合、カナダへの輸出が二一%に達するが、このうち小麦の大部分はカナダ経由でイギリスへ再輸出されているとみられるから、六〇年代後半のイギリスのシェアはもつと大きかったと考えてよい。だから六〇年代後半から八〇年代後半にかけても対英依存度は下がっているとみられる。

綿花の場合、六〇年代後半からイギリスのシェアは着実に下がって、第一次大戦前には四〇%になる。世界の綿花輸出に殆ど独占的な地位を持つアメリカは、各工業国の需要の増加と共に、輸出先をドイツ、フランス、イタリー等に拡大していったのであつた。穀物の場合も輸出相手国は、西ヨーロッパ各国へと拡大していった。

南北戦争前、あるいは戦後でも六〇年代までのアメリカは、ヨーロッパに対する原料農産物(綿花、タバコ)の供給国であつたが、七〇年代以降小麦を中心とする食糧輸出が急速に伸びて、一九世紀の末には一時綿花の王座を奪うのである。第四三表でみるように、小麦輸出が最高の水準に達した一九世紀末には、穀物輸出は総輸出の二一%に達し、綿花の一九%を抜く。しかし二〇世紀に入ると穀物輸出は急速に減少し、綿花が伸びたために、再び綿花は王座につくが、輸出全体に占める綿花の地位は下がり、また農産物全体の地位も下がる。

第 43 表 アメリカの主要農産物輸出額

(単位：百万ドル、%)

	輸出総額	綿 花	穀 類	うち小麦	タ バ コ
1866~1870平均	307 (100)	205 (67)	-	23 (7)	23 (7)
1881~1885平均	775 (100)	219 (28)	196 (25)	158 (20)	19 (2)
1896~1900平均	1,136 (100)	221 (19)	242 (21)	148 (13)	25 (2)
1909~1913平均	1,992 (100)	513 (26)	151 (8)	101 (5)	40 (2)

注. 小麦の1881~1885年以降には小麦粉を含む。輸出総額は国内産品の輸出である。U. S. D. C., *Historical Abstract (op. cit.)*, pp. 889, 890, 898, 899. および, U. S. D. C., *Statistical Abstract of the U. S.* (1885, 1902, 1913) による。

このアメリカの農産物輸出の変化は、七〇、八〇年代におけるヨーロッパからの大量の移民の流入、第二次鉄道建設に伴う西部開拓の目覚ましい進展による小麦を中心とする穀物生産の拡大に始まり、その結果としての大量の穀物輸出が一九世紀末まで続くが、それ以後は人口増と工業化に伴う国内需要の増加によって、輸出が吸収されてしまうという過程であった。第一次大戦前になっても、アメリカは輸出面でみる限りなお後進農業国であった。一九〇九~一三年の輸出に占めるシェアで、原料は三三%、食糧六%、加工食糧一五%で過半が原料、食糧であった。しかしこの比重は一八五六~六〇年当時は八五%であった八六~九〇年でも七八%であった、そして完成品輸出の比重は八六~九〇年で一六%、一九〇九~一三年で三〇%であったし、半製品の比重は八六~九〇年で六%、一九〇九~一三年で一六%であった。⁽⁹⁾しかしアメリカは輸出面においても、工業的な性格を持ち始めていた。

アメリカは一九世紀末には、熱帯産品の世界でも最大の輸入国であった。前掲第一五表でみるように一九〇九~一三年で、砂糖の輸入量の三七%を占めてイギリスを大きく引き離していたし、茶は第三位の輸入国であった。コーヒーは同時期に世界の輸入の三四%を占め、第二位ドイツ(一五%)を大きく引き離していた。⁽¹⁰⁾砂糖の輸入先は圧倒的にキューバであり、次いでオランダ領東インド、フィ

第44表 アメリカの砂糖、茶の輸入先
(1909~1913年平均) (単位: %)

砂糖(粗糖)		茶	
合計(千トン)	1909	合計(千トン)	45
イギリス	0	イギリス	12
ドイツ	1	カナダ	3
キューバ	82	イギリス領インド	2
サント・ドミンゴ	1	セイロン	8
オランダ領東インド	9	中国	25
フィリピン	5	日本	48

注. 出所は第41表に同じ(131頁).

ていままでふれなかつたが、生糸の輸出は日本、中国とイタリーを主とするヨーロッパの二地域からおこなわれ、アメリカと西ヨーロッパ諸国によつて輸入され加工されていた。アメリカの輸入先は五三%が日本、二二%が中国であり、イタリー、フランスは合計一八%にすぎなかつた。一方日本の輸出先の七〇%がアメリカであり、フランス、イタリーは二七%であつた。生糸をめぐる日米間に強い相互依存関係が存在した。

リピンであり、独自の供給源を確保していたのである。茶の場合、日本が最大の輸入先で、次いで中国で両国で七三%に達する。輸入先はイギリスとは大きく違つていた(第四四表)。
アメリカはまた生糸の最大の輸入国であつた。一九〇九〜一三年(以下同じ)で三四%のシェアを占め、フランスの二五%を大きく上回つていた(第四五表)。生糸貿易につい

第45表 生糸の貿易(1909~1913年平均)

輸 出				輸 入			
合計		千トン	%	合計		千トン	%
合 計		32.0	100.0	合 計		31.0	100.0
日	本	9.65	30.2	ア	メ	10.66	34.4
イ	タ	7.96	24.9	フ	ラ	7.70	24.8
中	国	7.36	23.0	ド	イ	4.00	12.9
ト	ル	1.81	5.2	イ	タ	3.92	12.6
第輸出 二次国	フ	2.32	7.2	イ	ン	1.23	4.0
	ド	0.72	2.2	ス	イ	0.65	2.1
	ア	0.06	0.2	イ	ギ	0.49	1.6

注. L. B. Bacon & F. C. Schloemer, *op. cit.*, pp. 470-471.

第 46 表 イギリス領インドの穀物輸出先

(単位：%)

	小 麦		米			
	1886~1890 平 均	1909~1913 平 均		1869~1870 平 均	1886~1890 平 均	1909~1913 平 均
合計(千トン)	828	1,329	合計(千トン)	675	1,425	2,464
イギリス	50	75	イ ギ リ ス	49	20	7
フランス	14	8	ド イ ツ	1	1	14
ベルギー	12	11	オ ラ ン ダ	-	-	10
イタリー	13	3	オーストリー ・ハンガリー	-	-	8
エジプト	9	0	エ ジ プ ト	-	25	2
オランダ	1	0	モーリシアス	8	5	2
スペイン	0	0	セ イ ロ ン	21	13	14
アラビア	1	0	海 峽 植 民 地	4	15	13
			ジ ャ ヲ	-	-	7
			日 本	-	-	5

注. 総輸出である。しかし国産品輸出と殆ど同じである。小麦に小麦粉は含まない。出所は第37表に同じ(134, 137頁)。

一方、ドイツはその輸入の六〇%をイタリアから、一六%をスイス、一四%をフランスからとり、日本は五%にすぎなかった。またフランスは中国に四八%を依存し、日本に二〇%、トルコに一一%、イタリアに一二%を依存していた。中国にとって対フランス輸出が第一で次いでアメリカであった。イタリアにとってはドイツが第一で、次いでアメリカ、フランスとなった。生糸貿易はこのような日米間の結びつきを中心として、中国、イタリアもそれぞれ特異な結びつきの型を持っていた。なおアメリカの日本生糸に対する選好は、アメリカが絹織物の機械制生産の先進国であり、機械織りのためにとくに均質な日本生糸を必要としたためであった。⁽¹⁾

6 インド

イギリス領インドは一八七〇年以前には、小麦輸出は殆どなかった。南北戦争中に拡大された綿花栽培地に、戦後小麦が導入されるに及んでインドは小麦の輸出国と

第 47 表 米の貿易 (1909~1913年平均)

(単位:千トン, %)

				輸 出	輸 入
世 界 計				5,863 (100)	5,473 (100)
東 南 ア ジ ア	イ	ン	ド	2,438 (42)	161 (3)
	日		本	-	476 (9)
	オランダ領東	イ	ン	-	456 (8)
	セ	イ	ロ	-	386 (7)
	中		国	-	304 (6)
	フ	イ	リ	-	187 (3)
	イ	ン	ド	896 (15)	-
	タ		シ	792 (14)	-
ヨ ー ロ ッ パ	朝	鮮・合	湾	213 (4)	-
	マ	レ	イ	524 (9)	705 (13)
	イ	ギ	リ	107 (2)	255 (5)
	ド	イ	ス	180 (3)	417 (8)
	フ	ラ	ン	36 (1)	259 (5)
	オ	ラ	ン	197 (3)	351 (6)
	ロ	シ	ア	-	120 (2)
	オーストリー・ハン			-	124 (2)
そ の 他	ア	メ	リ	69 (1)	41 (1)
	キ	ユ	ー	-	120 (2)
	ト	ル	コ	-	105 (2)

注. L. B. Bacon & F. C. Schloemer, *op. cit.*, pp. 102-105.

して台頭した。その輸出は八〇年代後半には半分がイギリスに向けられていたが、他の西欧諸国向けもかなりあった。第一次大戦前には小麦輸出は五〇%伸びたが、輸出先は一層イギリスへと集中し、フランスやイタリーの比重は低下した(第四六表)。

米はインド(当時はビルマを含む)にとつて、小麦以上

の輸出穀物であった。第一次大戦前のインドの米輸出は、世界全体の四二%を占めていた。しかもビルマを除けば、インドは最大の米の輸入国であり、第一次大戦前の五カ年平均でビルマからインドへの米の輸出は、七八万トンに達した(しかしこれは貿易ではなく国内取引であった⁽¹²⁾)。第四七表にみるように、この取引を除くなら米の最大の輸入国は日本であり、次いでオランダ領東インドであり、セイロンであった。マレーは輸入量では最大であったが、その大半は再輸出された。輸出国はもっぱらインドシナ、タイの東南アジア諸国であり、米の貿易は東南アジアで一つのサークルを作っていた。しかしまたかなりの部分はヨーロッパへと輸出された。イギリス、ドイツ、オラン

第 48 表 インドの茶、綿花の輸出先

(単位：%)

	茶				綿 花		
	1869～ 1870 平 均	1886～ 1890 平 均	1909～ 1913 平 均		1869～ 1870 平 均	1886～ 1890 平 均	1909～ 1913 平 均
合 計(千トン)	6	44	121	合 計(千トン)	288	288	436
イ ギ リ ス	98	94	73	イ ギ リ ス	77	34	5
オーストラリ	0	3	3	フ ラ ン ス	7	11	5
ア	0	0	0	ド イ ツ	1	6	15
ペ ル シ ア	1	3	0	オーストリー	—	13	7
ア メ リ カ	0	0	1	・ハンガリー	—	—	—
ト ル コ	0	0	1	オ ラ ン ダ	1	0	0
ド イ ツ	0	0	0	ベ ル ギ ー	—	15	12
中 国	—	0	3	イ タ リ ー	—	15	10
カ ナ ダ	—	—	4	中 国	9	3	2
ロ シ ア	—	—	10	日 本	—	0	42

注：総輸出をとるが国産品輸出と差はない。出所は第37表に同じ(141, 142頁)。

ダに輸入された米は、半分前後が再輸出された。ヨーロッパにおける最大の市場はドイツであり、醸造用、デンプン原料、飼料として用いられた。⁽¹³⁾

こういった米貿易のなかで、インドの輸出はヨーロッパに特に向けられていた。イギリスへの集中は八〇年代後半以降みられないが、第一次大戦前、二四六万トンにまで伸びた輸出の四〇%は西ヨーロッパに行った。次いでセイロン、海峽植民地、エジプト、モリシアス等、イギリスの植民地へと輸出された。インドは最大の輸出国であるが、最大の輸入国たる日本、オランダ領東インドとの関係は薄かった。小麦の場合のイギリスへの集中は前述したが、小麦粉輸出の場合、量的には第一次大戦前で六万六千トン、八〇年代後半で二万五千トン(いずれも小麦換算)にすぎなかったが、その行先はもっぱらエジプト、アラビア、アデン、モリシアス、セイロン、東アフリカといった東方のイギリス植民地であった。⁽¹⁴⁾ 茶の輸出もまたイギリスへ集中していた(第四八表)。一八七〇年頃、八〇年代後半の九〇%台のイギリスのシェアは、

第一次大戦前には七三%まで下がるが、それはもっぱらロシア、カナダへの輸出の増加によるが（この間の輸出货量全体の急増があり、イギリスのシェアは落ちても、その輸血量自体は倍以上になっている）、イギリスの比重が圧倒的なことには変わりなかった。このようにインドの農産物輸出の特徴は、その強いイギリス、つまり本国への従属であった。本国に関係の少ない場合は、イギリス植民地が主要な輸出市場であった。つまりインドの農産物は全くイギリス帝国の枠に組み込まれていたのである。

唯一の例外は綿花であった。一八七〇年頃には綿花の輸出先も七七%はイギリスであった。しかし八〇年代後半には三四%に落ち、インド綿はベルギー、イタリー、フランス、オーストリー・ハンガリー、ドイツの西ヨーロッパが六〇%になる。そして第一次大戦前になると、輸出先は大きく日本に傾いてくる。このインド綿の市場の変化は、多分にその品質上の特性のためであった（第四八表参照）。

7 その他

最後に穀物に限って、残った主要輸出入国の第一次大戦前の貿易構造を明らかにしておこう。第四九表にみるように、カナダ、オーストラリアの小麦輸出は、イギリスに集中していた。オーストラリアの場合、アフリカ諸国やアジアにもかなりの部分が、小麦粉の形態での輸出を含めて向けられており、その点インドと類似した面があった。ルーマニアのベルギー、オランダへの輸出は、かなり再輸出されてドイツ、フランスに向かったものと思われる。しかしドイツの側の統計をみても、その関係はロシアに比すればずっと小さかった。そしてやはりルーマニアはベルギーとの関係が強かった。またルーマニアはイタリー、オーストリー・ハンガリーとかなりの関係を持っていた。

同じ黒海からの輸出国であっても、ルーマニアはロシアとは違った輸出構造を示していた。

アルゼンチンの特色は、その輸出先の分散である。イギリスが比較的多かったとしても一五%にすぎなかった。アルゼンチンの輸出先としては南米(ブラジル等)、アフリカ等がそれぞれ一〇%近くあった。この点同じ新開国であつても、イギリスの自治領たるカナダ、オーストラリアとは非常に違つていた。

第49表 カナダ、アルゼンチン、ルーマニア、オーストラリアの穀物輸出 (1909~1913年平均) (単位:千トン, %)

輸出国	仕向国		イギリス	ドイツ	フランス	イタリア	ベルギー	オランダ	オーストリア・ハンガリー
	合	計							
カナダ	穀物	2,838 (100)	2,279 (80)	-	-	-	45 (2)	15 (1)	-
	うち小	2,459 (100)	2,096 (85)	-	-	-	43 (2)	15 (1)	-
アルゼンチン	穀物	6,168 (100)	910 (15)	306 (5)	264 (4)	302 (5)	561 (9)	215 (3)	16 (0)
	うち小	2,587 (100)	436 (17)	96 (4)	103 (4)	122 (5)	285 (11)	98 (4)	1 (0)
	えん	618 (100)	222 (36)	27 (4)	50 (8)	67 (11)	72 (12)	53 (9)	1 (0)
	とうもろこし	2,940 (100)	247 (8)	181 (6)	110 (4)	112 (4)	198 (7)	60 (2)	14 (0)
ルーマニア	穀物	3,030 (100)	222 (7)	115 (4)	143 (5)	382 (13)	1,129 (37)	363 (12)	353 (12)
	うち小	1,440 (100)	40 (3)	38 (3)	98 (7)	212 (15)	625 (43)	144 (10)	126 (9)
	大麦	353 (100)	56 (16)	29 (8)	3 (1)	8 (2)	156 (44)	57 (16)	11 (3)
	えん	157 (100)	20 (13)	5 (3)	9 (6)	21 (13)	51 (32)	25 (16)	17 (11)
	とうもろこし	990 (100)	101 (10)	41 (4)	31 (3)	139 (14)	259 (26)	101 (10)	198 (20)
オーストラリア	小麦	1,335 (100)	865 (65)	8 (1)	46 (3)	16 (1)	33 (2)	0 (0)	-

注: 小麦には小麦粉(小麦換算)を含む。出所は I. I. A., *op. cit.*

第50表 イタリア、ベルギー、オランダの穀物輸入 (1909～1913年平均)

(単位: トン, %)

仕出国		輸入国	合 計	ロ シ ア	ルーマニア	アメリカ	アルゼンチン	オーストラリア	インド	カナダ
イタリア	穀物	計	2,080 (100)	932 (45)	478 (23)	89 (4)	414 (20)	66 (3)	-	-
	うち小 麦		1,558 (100)	888 (57)	290 (19)	85 (5)	164 (11)	66 (4)	-	-
ベルギー	穀物	計	378 (100)	24 (6)	162 (43)	2 (1)	180 (48)	-	-	-
	うち小 麦		378 (100)	24 (6)	162 (43)	2 (1)	180 (48)	-	-	-
オランダ	穀物	計	4,754 (100)	2,264 (48)	502 (11)	619 (13)	512 (11)	-	3 (0)	-
	うち小 麦		2,078 (100)	952 (46)	155 (7)	423 (20)	168 (8)	-	-	-
オランダ	穀物	計	797 (100)	585 (73)	75 (9)	12 (2)	2 (0)	-	-	-
	うち小 麦		751 (100)	107 (14)	138 (18)	149 (20)	272 (36)	-	0 (0)	-

注: 出所は前表に同じ。

第五〇表にヨーロッパの三輸入国を掲げる。イタリアはその交通上の地位と小麦の品質に対する要求のために、ロシアとルーマニアの小麦に強く依存していた。またアルゼンチンとルーマニアのとうもろこしも大きな比重を占めていた。オランダ、ベルギーは名目的には大輸入国であるが、再三述べたように通過貿易が多く、純輸入は少なかった。ことにオランダは四七五万トンの穀物輸入に対し、三〇二万トンの輸出を行っていた。ことに輸入の半分近くを占めるロシアの穀物は、前述したように多くはドイツへと送られた。ベルギーはルーマニアとアルゼンチン

にもっとも依存していた。ルーマニアとの関係は、ルーマニアの側からみても強かったことは前述した。しかし概していえばベルギーの輸入先は分散していた。

- (1) V. P. Timoshenko, *Agricultural Russia and the Wheat Problem*, 1932, p. 481.
- (2) *ibid.*, pp. 470, 472.
- (3) M. E. Falkus, "Russia and the International Wheat Trade, 1861-1914", *Economica*, Vol. 33, Nov. 1966.
- (4) *ibid.*, pp. 422-425.
- (5) 農総合研究所、前出、九頁。
- (6) V. P. Timoshenko, *op. cit.*, p. 474.
- (7) イギリスのロシアよりのビター輸入は一万五千トン（一九〇八～一二年平均）、ドイツは五万二千トン（一九一～一三年平均）に対しロシアの輸出は六万八千トンであった。ロシアの輸出货量は L. B. Bacon & F. C. Schloemer, *op. cit.*, p. 228. 参照。
- (8) V. P. Timoshenko, *op. cit.*, p. 474.
- (9) U. S. D. C., *Historical Statistics of the United States, Colonial time to 1970*, Part 2, (Bicentennial ed.), pp. 889-902.
- (10) L. B. Bacon & F. C. Schloemer, *op. cit.*, p. 349.
- (11) 文中の数字は農総合研究所、前出、四頁。また L. B. Bacon & F. C. Schloemer, *op. cit.*, p. 451.
- (12) *ibid.*, pp. 79-80.
- (13) *ibid.*, p. 78.
- (14) 農総合研究所、前出、一三六頁。

五 多角的貿易体制と農産物貿易

農産物貿易の地域構造は、いうまでもなく貿易構造全体の一環であり、その性格の反映でもあった。ところでこの一八七〇年代から一九世紀末までの間は、世界経済が大きく変貌する時期であった。その変貌は一言でいえば、イギリス体制から帝国主義への移行ということが出来る。帝国主義といわれる資本主義の新しい段階は、生産力の重化学工業段階への発展を基礎とした独占資本の形成と、それに由来する国内、国外における新しい資本蓄積の様式を意味している。しかしまた同時に、それによってもたらされる新しい国際関係をも意味している。ここで取り上げようというのは、この新しい国際経済関係と、その結果として形成された新しい世界経済の構造であり、そのなかでの農産物貿易の位置づけである。

新しい国際経済関係は二つの側面を持っていた。一つは資本輸出とそれと結びついた植民地体制、あるいは経済的従属体制の発展であり、もう一つは複数の工業国の成立による、工業国間先進資本主義国相互の関係の登場である。帝国主義的世界経済は前者を縦糸とし後者を横糸として織りなされた。こうした新しい世界経済は、前章の最初にもふれたように、単一の工業国間イギリスを中心とし、それと多数の農業国との関係として存在していたイギリス体制の解体を意味していた。

まず当のイギリスからみてみよう。第五一表にみるようにイギリス貿易の交換様式は、五〇年代、六〇年代の工業製品と原料・食糧との交換が六〇%以上を占めるものから、世紀末になるとこの型の交換が三〇〜四〇%台のものへと変わった。その代わりに工業製品と工業製品の交換の比重が増加し、また原料・食糧と原料・食糧との交換

第51表 イギリス貿易の交換様式

(単位：%)

	「見えざる 項目」と商 品との交換	食料・原料 と食料・原 料との交換	工業製品と 工業製品と の交換	工業製品と 食料・原料 との交換	合 計
1854~1863	14.2	11.1	8.8	65.9	100.0
1864~1873	12.1	10.9	13.2	63.8	100.0
1874~1883	20.3	12.1	17.2	50.4	100.0
1884~1893	18.2	14.3	20.1	47.4	100.0
1894~1903	23.9	16.3	25.3	34.5	100.0
1904~1913	15.1	20.0	22.7	42.2	100.0

注. A. O. Hirschman, "The Commodity Structure of World Trade",
Quarterly Journal of Economics, Vol. LVII, Aug. 1943, p. 590.

第52表 イギリス貿易の商品別構成

(単位：%)

商品分類 5カ年平均		食 料	原 料	工業製品	その他	計
		(百万ポンド)				
輸 入	1866~1870	33.7	45.9	11.8	8.6	100.0 (293)
	1880~1884	41.4	35.8	16.4	6.4	100.0 (408)
	1896~1900	43.0	32.2	24.3	0.5	100.0 (474)
	1908~1912	39.2	36.4	24.0	0.4	100.0 (664)
国 産 品 輸 出	1866~1870	3.2	4.0	88.2	4.6	100.0 (188)
	1880~1884	4.4	7.9	84.2	3.6	100.0 (234)
	1896~1900	4.9	11.0	82.8	1.2	100.0 (253)
	1908~1912	6.2	12.7	79.1	1.9	100.0 (425)
再 輸 出 、	1866~1870	21.7	54.5	11.1	12.8	100.0 (47)
	1880~1884	23.7	50.1	16.0	10.2	100.0 (64)
	1896~1900	19.7	54.7	25.4	0.2	100.0 (61)
	1908~1912	13.3	59.3	27.1	0.2	100.0 (98)

注. 食料には嗜好品をふくむ。その他は生きた動物、郵便小包等の他に、1866~1870年、1880~1884年については「その他」として品目不明のものを含む。分類については H. M. S. O., *Annual Statement of the Trade of the U. K. with Foreign Countries and British Possessions*, 1912, Vol. I, pp. 10-18 によって行う。出所は 1866~1870 年については *Statistical Abstract (op. cit.)* により、その他は第21表に同じ。

第53表 工業国とイギリスとの貿易（商品分類別比率）

（単位：%）

品 目	相手国				イ	ッ	7	ス	リ	カ	7	ラ	ソ	ス
	ド													
合 計	輸入(チボソフ) 輸出(チボソフ)	25,021 18,082	28,728 24,074	61,081 36,464	96,832 28,684	120,866 18,807	123,427 28,019	39,423 16,860	52,294 15,388	43,504 23,167				
食 料	輸 入	55.5	45.1	20.0	51.3	49.6	33.9	32.9	31.8	24.1				
原 料	輸 入	6.5	5.5	9.3	1.8	4.7	8.3	5.1	2.9	4.3				
	輸 出	14.4	12.9	8.8	38.2	30.1	48.4	6.6	9.4	14.2				
工業製品	輸 入	17.9	17.6	19.1	7.0	11.9	14.4	14.3	26.3	29.0				
	輸 出	15.1	36.4	70.3	4.6	12.8	17.5	49.7	54.4	60.5				
その他	輸 入	68.0	71.6	69.2	84.7	79.6	76.1	70.9	63.1	63.4				
	輸 出	15.0	5.6	0.9	6.0	7.5	0.2	10.7	4.5	1.3				
	輸 入	7.6	5.4	2.5	6.5	3.8	1.2	9.7	7.8	3.2				

注. 輸出は国内産品の輸出で再輸出は含まない、商品分類、出所は第21表に同じ。

の比重も、商品と「見えざる項目」との交換の比重も増加した。つまり世紀末になるとイギリスの「世界の工場」としての交換様式は減少しているのである。

このことはイギリスの貿易の性格が、工業製品の輸出と食糧・原料の輸入であることを変えるものではなかった。第五二表にみるように、イギリスは一九世紀後半から大戦前にかけて、その輸入の七五%前後は食糧・原料であり、輸出の八〇%は工業製品であった。ただ工業製品の輸出が若干減少し、その輸入が若干増加しているだけであった。

交換様式の変化との関連で考えるならば、工業製品比重の減少分は「見えざる項目」の比重の増加によってカバーされているともいえる。「見えざる項目」の一部は食糧・原料と交換される。そしてまたのこりの「見えざる項目」との交換、工業製品輸出との交換で工業製品の輸入が増加しているのである。

第五三表に他工業国との貿易をみると、ドイツ、アメリカ、フランスの三相手国に共通していることは、食糧輸入比率の減少と工業製品輸入比率の増大であり、食糧・原料輸出入比率の増加と工業製品輸出入比率の減少である（ドイツとはほぼ横這い）。つまりかつてイギリスを工業国とし、これらの国々を農業国としていた貿易構造は、八〇年代以降失われつつあるわけである。ことにドイツとの関係の変貌は目覚しかった。八〇年代前半、ドイツからの輸入の七〇％は食糧・原料であったのが、一九世紀末には六〇％未満に下がり、第一次大戦前には三〇％を割るに至っている。それに代わって工業製品の輸入は八〇年代前半の一五％から一九世紀末三六％、第一次大戦前七〇％と急増しており、一方輸出については一貫して七〇％前後の工業製品比率を保っていた。イギリス・ドイツ関係は、工業製品と食糧の交換から、工業製品と工業製品との交換へと推転したのである。

イギリスのドイツからの輸入工業製品は（一九〇八〜一二年）、自動車、化学製品、染料、機械、鉄鋼製品といった重化学工業製品が二二％を占めており、ドイツへの輸出入工業製品は、綿製品、羊毛製品が五一％を占めていた。この点、軽工業的なイギリスと重工業的なドイツとの水平分業のように見える。しかしまた一方、ドイツのイギリスへの最大の輸出品は砂糖であり、それは全輸出の一四％を占めていたのである。一八八〇〜八四年においても、砂糖は二四％を占めたが、当時砂糖に次ぐドイツからの輸出品であった穀物が、えん麦を除いては全くなかった。二〇世紀初頭にも、砂糖の輸出は比率はへつても残っているわけである。イギリスにとってもドイツからの砂糖は、

砂糖輸入の三八%（一九〇八―一二年）を占めた。またイギリスのドイツよりの輸入の主要品目に、絹製品、羊毛製品、衣服の繊維品が入っている。その額はイギリスから輸出される繊維品の金額に匹敵するものであった。またイギリスの主要輸出品のうちには塩漬ニシンや石炭があった。このようにみるとイギリス・ドイツ間の貿易は、工業国相互間のその産業の特性に応じた国際分業を表現するものといつてよい。⁽¹⁾

アメリカとの場合、同じ工業国でもドイツとは異なっていた。減少したとはいっても食糧輸入の全体に占める比率は高く、原料の場合はその比重はむしろ大きく高まった。綿花だけで総輸入の三八%（一九〇八―一二年）にたった。この比率は一八八〇―八四年の三二%を上回った。さらに石油、木材が主要輸入原料品目であり、これも八〇年代前半と変わりなかった。食糧では八〇年代前半には食糧全体の三二%に達した畜産物が減少し、小麦、とうもろこしの輸入も減少した。しかしイギリスにとってなおアメリカは、小麦、とうもろこしの第二位の輸入先であった。アメリカの工業製品の輸出は皮革、銅、機械で四七%を占めたが、機械にアメリカの重工業の先進性がみられる他は半製品であった。イギリスからの輸出は麻製品、綿製品、毛織物の繊維品が多く、金属製品がこれに次いでいた。このようにイギリス・アメリカ関係は依然として工業国・農業国型であった。

フランスとの関係はドイツと似て、工業製品の比重が輸出入共に六〇%を占めていた。ただフランスの場合、この傾向は八〇年代前半からみられていたのである。フランスからの輸入はブドウ酒類、バター、絹製品、羊毛製品を中心とする繊維品、自動車であり、繊維品の比重は四〇%をこえた。これに対し輸出は石炭を筆頭に、金属製品、毛織物であり、原料（殆ど石炭）の多いのが目立っている（いずれも一九〇八―一二年）。フランスはイギリスに対し一貫して軽工業製品の輸出国ではあったが、そうかといつてイギリスがフランスに対し重工業製品の輸出

国だったわけではない。両者は雑多で錯綜した工業国間の関係であった。

第五四表はロシア、オランダ、デンマークとの関係である。この三国との関係は明白に食糧・原料の輸入と工業製品の輸出である。しかもこの関係は、一八八〇年代前半から第一次大戦前にかけて強化されてきているのである。ことに食糧輸入の比率は三国とも高まっていた。デンマークの場合、八〇年代前半六〇%だったそれは、第一次大戦前には実に九八%に達している。オランダも三九%が七〇%へと高まった。原料についてはロシアだけが八〇年

第54表 ヨーロッパの農産物輸出国とイギリスとの貿易（商品分類別比率）（単位：%）

品 目	相手国	ロ シ ア			オ ラ ン ダ			デ ン マ ー ク		
		1880～1884	1896～1900	1908～1912	1880～1884	1896～1900	1908～1912	1880～1884	1896～1900	1908～1912
合 計	輸入（チホソフ） 輸出（チホソフ）	17,684 5,983	20,866 9,326	39,005 12,621	25,049 9,454	29,724 9,234	18,414 12,655	5,330 2,109	11,787 3,501	19,999 5,205
食 料	輸入 輸出	44.5 2.8	47.2 3.3	52.8 11.3	38.6 0.4	39.7 2.6	69.6 8.1	54.5 1.9	96.0 4.2	97.6 8.5
原 料	輸入 輸出	36.2 14.0	45.1 25.4	43.4 24.6	4.9 7.0	6.8 13.7	11.4 16.3	3.6 22.0	1.8 32.2	1.2 34.4
工業製品	輸入 輸出	17.6 74.0	6.9 68.6	3.8 62.9	41.4 80.9	49.1 77.7	18.3 72.5	0.3 63.3	0.8 53.6	1.1 55.6
その他	輸入 輸出	1.6 9.2	0.8 2.8	0.2 1.2	15.0 11.6	4.5 6.0	0.7 3.1	36.6 12.9	1.4 10.1	0.1 1.6

注. 出所は第21表に同じ.

代前半よりは、それ以後の方が若干比重が高まった。工業製品輸出の比率は、八〇年代前半に比すればすべて低下しているが、これは原料輸出の比重が高まったためである。

ロシアからの輸入は、穀物が最大で全輸入の三一%を占めていた。次いで卵、バターがそれぞれ八%を占めていた。原料では木材が最大で一七%をこえていた。次いで亜麻である。工業製品の輸入には目ぼしいものはなかった。イギリスの輸出は食糧では塩漬ニシン、原料では石炭が大部分を占め、工業製品では機械、金属製品が主要品目であった（いずれも一九〇八―一二年）。ロシアの穀物は八〇年代前半すでに、イギリスの対ロシア輸入の四四%を占めていたが、以後は畜産物の伸びが二〇世紀に入ってから著しく、その比重は低下するが、なおロシアはイギリスとの関係では穀物に特化していた。なおロシアへの工業製品の輸出では、八〇年代前半にも機械が二四%を占めており、綿製品の比重（九%）が少ないことは注目される。

オランダはイギリスに対する畜産物の供給国であった。第一次大戦前のオランダの対イギリス畜産物（マーガリンを含む）輸出は、全食糧輸出の五四%（マーガリン、肉類が主力）であり、砂糖が一六%であった。八〇年代前半でも、畜産物はオランダからの食糧輸入の五七%であり、砂糖は一五%であった。イギリスからの輸出は石炭（全輸出の九%）、綿製品（同二三%）、金属製品（同一〇%）であったが（一九〇八―一二年）、八〇年代前半でも石炭の比重が低く、羊毛製品の比重が高い点を除けば大差なかった。イギリス・オランダ貿易の特徴はオランダからイギリスへの工業製品の輸出が、二〇世紀に入って激減していることであろう。オランダのイギリスへの輸出が、二〇世紀になって食糧へと急速に特化したのは、畜産物輸出の増加よりも、工業製品輸出の急減のためであった。八〇年代前半イギリスはオランダから、鉄鋼製品、金属製品、繊維品（とくに絹織物、毛織物）、染料、その

他雑多な工業製品を輸入していたのが、第一次大戦前には工業製品はボール紙が目立つぐらいのものにへってしまつた。この理由はわからないが、一つはドイツ製品のオランダ経由の輸出が以前には多かったのが、第一次大戦前には直接輸出に変わったためであらう。

デンマークの場合、イギリスとの関係は一層單純であつた。一九世紀末から輸入の殆どすべてが食糧であつた。第一次大戦前にはその五三%がバターであり、三三%がベーコンであり、九%が卵であつた。八〇年代前半以来のデンマークよりの輸入の急増は、これら畜産物輸入の増加に外ならず、他の輸入は全くとるに足りなかつた。イギリスからの輸出は石炭と雑多な工業製品であり、伸び率としては輸入並みのテンポで八〇年代前半より増加してきつた。

イギリスは一方ではドイツ、フランスとの関係においては工業国―農業国的性格を失いながら、一方ではいままゝのように、八〇年代以降にむしろ工業国―農業国関係をロシア、オランダ、デンマークに対して強化し、あるいは新たに作り出しているのである。ことにデンマークは小国でもあり、全くイギリスのためのバター、ベーコンの供給地に転化した。デンマークは一九一―一三年にそのバター輸出の九三%をイギリスに送り、それは前にもみたようにイギリスのバター輸入の四〇%に相当した。⁽²⁾

イギリスの農産物の有力な供給国はその植民地であつた。イギリスの最大の輸出市場であつたインドは、また主要な農産物供給国でもあつた(第五五表)。インドからの輸入の八五%は食糧・原料であり(一九〇八―一二年)、食料の比重は八〇年代前半以後高まつてきた。食糧は小麦、茶、米が主品目でこの三つで第一次大戦前には八七%を占めた。八〇年代前半でも八六%であつた。原料としてはジュートが最大で、次いで綿花、油糧種子、羊毛であ

第55表 植民地とイギリスとの貿易（商品分類別比率）（単位：%）

品 目	相手国	英 領 イ ン ド			カ ナ ダ			オーストラリア
		1880~ 1884	1896~ 1900	1908~ 1912	1880~ 1884	1896~ 1900	1908~ 1912	1908~ 1912
合 計	輸入 (千ポンド)	35,200	26,539	41,071	11,132	19,597	25,359	35,102
	輸出 (千ポンド)	30,242	29,746	49,774	8,115	6,189	18,165	28,063
食 料	輸入	33.3	36.0	42.7	46.7	58.4	76.6	36.3
	輸出	2.3	3.1	3.5	3.0	4.7	8.1	7.3
原 料	輸入	7.9	40.3	42.0	39.6	27.3	17.9	54.1
	輸出	1.3	0.9	1.0	1.8	3.4	2.9	1.2
工業製品	輸入	12.7	22.1	14.9	1.5	2.7	5.0	9.7
	輸出	92.9	92.9	94.4	86.4	84.8	85.6	90.2
そ の 他	輸入	2.1	1.7	0.3	12.2	11.5	0.5	0.1
	輸出	3.3	3.1	1.1	8.8	7.1	3.5	1.9

注。出所は第21表に同じ。

った。工業製品の輸入はジュート加工品、皮革であり、八〇年代前半には染料もあったが、いずれも半製品的なものであった。イギリスからの輸出は一貫して工業製品、それも綿製品であった。第一次大戦前に工業製品の五二%が綿製品であり、八〇年代前半には六二%であった。次いで鉄鋼、機械、銅であった。

カナダからの輸入は食糧・原料が九五%であり、うち食料が七七%であった（一九〇八―一二年。以下特にことわらない限り同じ）。一九世紀末、八〇年代前半にさかのぼっても、食糧・原料の輸入に占める比重は八六%であり、そのなかで食糧がふえ、原料がへってきた。食料は小麦、チーズ、ベーコン、生畜の順であり、原料は三分の二は木材であった。イギリスからの輸出は工業製品が一貫して八五%前後を占めていた。品目は毛織物、鉄鋼製品、綿製品が主位を占めており、合計で対カナダ工業製品輸出の三八%になった。

オーストラリアからの輸入の九〇%も食糧・原料であり、最大の品目は勿論羊毛であって全体の三九%を占めた。食料

はバター、小麦、肉類であつた。輸出は九〇%が工業製品のうち綿製品、機械、鉄鋼製品、毛織物が主品目であつた（一九〇八―一二年）。このようにインド、カナダ、オーストラリアとイギリスとの関係は、依然として典型的な工業国―農業国型であり、むしろこの性格は強化されているのである。

イギリスの貿易構造で注目すべき点は、植民地との関係であつた。それが工業国―農業国型であつたことは前述したが、そのイギリス貿易に占める比重は、輸出においては一八六〇年代後半の二三%から、八〇年代後半の二九%、第一次大戦前の三五%へと増大し続けた。しかし輸入においてはそのシェアは二三%、二三%、二一%と殆ど変わらなかつた。植民地の輸出市場としての役割が強まっていることがわかる。⁽³⁾

このように第二次大戦前のイギリスの貿易構造は、ヨーロッパの農産物輸出と植民地に対しては、またアメリカに対しては工業国―農業国形態を続け、ないしは強化し、一方ではドイツ、フランスとは工業国―工業国形態へと転化していた。しかもアメリカとの関係は、貿易面では工業国―農業国型ではあるが、アメリカ自体はすでにイギリスをしのぐ先進工業国であり、その農産物輸出は工業国の農産物輸出であり、後進国におけるように低賃金に支えられた安い費用⇨価格ではなく、高い生産力水準に支えられた安い費用⇨価格による輸出に外ならなかつた。

カナダ、オーストラリアについてもこの点は類似している。第五六表にみるように一九世紀末の農業所得比率でみて、カナダ、オーストラリアはドイツに匹敵し、決して農業国とはいえないのである。アメリカは勿論イギリスに次いで低い農業所得比率であつた。オランダもまたドイツ並みであつた。だから農業国的といえるのはロシア、東欧、アルゼンチン、そして数字はわからないがインド、エジプト、ブラジルにすぎなかつた。かくて農産物輸出はアメリカ、カナダ、オーストラリア、西欧の工業国からの農業生産力の高さに由来するものと、ロシア、東欧、

第 56 表 各国の農業所得比率およびイギリス、ドイツ、
アメリカへの貿易依存度

(単位：%)

	農業所得 比 率 (1895)	貿 易 依 存 度 (1913)					
		イ ギ リ ス		ド イ ツ		ア メ リ カ	
		輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出
イ ギ リ ス	10	—	—	12	8	20	6
フ ラ ン ス	21	13	21	13	13	11	6
ド イ ツ	19	8	14	—	—	6	7
オ ラ ン ダ	20	9	21	29	48	11	4
ベ ル ギ ー	15	10	15	15	25	8	3
デ ン マ ー ク	—	16	57	38	25	10	1
ス ウ ェ ー デ ン	(25)	24	29	34	22	9	4
オーストリー・ ハンガリー	(27)	6	10	40	44	10	3
ロ シ ア	32	13	18	48	30	6	3
ル ー マ ニ ア	(36)	9	7	40	8	5	0
ア メ リ カ	15	15	24	10	14	—	—
カ ナ ダ	18	21	50	2	1	64	38
ブ ラ ジ ル	—	25	13	18	14	64	33
アルゼンチン	29	31	25	17	12	15	5
エ ジ プ ト	—	31	43	6	13	2	8
南 ア フ リ カ	—	57	89	8	3	9	1
イ ン ド	—	64	24	7	11	3	9
日 本	—	17	5	9	2	17	29
オーストラリア	20	52	44	9	9	14	3

注. 農業所得比率のスウェーデンはスカンジナビア、オーストリー・ハンガリーはオーストリー、ルーマニアはダニューブ諸国をとる. M. G. Mulhall, *op. cit.*, p. 747 による. 貿易依存度は League of Nations, *Memorandum on International Trade and Balances of Payments, 1913-1927*, Vol. I, 1928, pp. 268-307 による.

一
二
六

インド等の低賃金労働に由来する農業国型のものとの二つに分かれた。イギリスはこの両者にそれぞれ広くかかわっていたのである。

もう一つの側面は各農産物輸出国のイギリスへの依存度であった。第五六表にみるように、イギリスへの貿易依存度は多くの国で一〇%台であった。アメリカは輸出において二四%であったが、輸入

では一五%、デンマークは輸出では五七%と大きいが、輸入では一六%にすぎなかった。カナダもまた輸出で五〇%だが、輸入では二一%、インドは輸入では六四%であったが輸出では二四%であった。オランダは輸出二一%だが輸入は九%と低かった。輸出入共に高いイギリスへの依存度を示すのは、オーストラリア、南アフリカ、エジプトに限られていた。このことは勿論、各国がイギリス以外の国々と多く貿易を行っていることを意味している。デンマーク、カナダのように輸出ではイギリスに強く依存しても、輸入は他の国が多い場合もあった。インドはその逆に、輸入ではイギリスに強く依存しながら輸出先は広がった。そのインド輸出のイギリス依存度も、以前にはもっと高かったのである。一八七〇年にそれは五〇%であったが、九〇年代なかばには三二%になった。インドの高い輸入依存度さえ七〇年代の八〇%からみれば下がっていたのである。⁽⁴⁾

イギリスへの農産物輸出国にみられる輸出依存度と輸入依存度のアンバランスは、貿易収支のアンバランスを意味していた。そしてこのアンバランスは一般的なものであった。第五三、五五表でも、ドイツ、アメリカ、フランス、ロシア、デンマーク、カナダに対しイギリスは入超であり、インドに対して出超であった。ことにアメリカ、ドイツ、ロシア、デンマークへのイギリスの入超は著しかった。

イギリスは一九世紀の第四・四半期以降、西ヨーロッパとアメリカへの入超を拡大してきた。そしてその他の諸国への入超を縮小し、第一次大戦前には出超へと転化する。イギリスはそもそも一九世紀初頭以来、一貫して貿易収支は赤字であり、その赤字を「見えざる項目」、主として海外投資からの報酬によってカバーしてきた。⁽⁵⁾ 一九世紀末になってますます増大する海外投資からの報酬と貿易外収入が、増大する貿易収支の赤字をカバーしたが、同時に貿易赤字の決済は、貿易自身のなかでも行われた。つまりインドなどへの貿易黒字によって、ヨーロッパ、ア

メリカへの赤字が一部決済されたのである。かかるイギリスの貿易収支の赤字とその決済方式は、多角的決済の従つて多角的貿易体制の存在を示すものであった。そしてこの多角的貿易決済体制は、前述したイギリスの海外投資の報酬とその再投資を、そのメカニズムの潤滑油として成立していたのである。⁽⁶⁾

イギリスはこの世界経済体制のなかで、やはり中心的地位を占めていた。⁽⁷⁾ イギリスはその開放された自由貿易体制によつて、最大の輸入市場、ことに農産物を中心とする第一次産品の最大の市場として、世界貿易の要をなしていた。イギリスの農産物輸入の分散性は、イギリスのこの世界経済における位置の反映であつた。そしてまたその巨大な農産物、ことに食糧需要によつて、多くの国々をイギリスへの食糧供給国たらしめていたことは先にみた通りである。イギリスはまたその海運力、金融力において世界をリードし、ロンドンの金融市場は国際金融の中心をなしていた。かくてイギリスは一九世紀末には、「世界の工場」から「世界の海運業者」、「世界の銀行」となつたのであつた。

ドイツもまた多角的貿易体制の一つの要になつた。ドイツの目覚しい工業発展は、一九世紀末からその原料・食糧輸入の増加によつて、アメリカ、アルゼンチン、オーストラリア、ニュージーランド、ブラジル、エジプト、インド、オランダ領東インド、さらにはロシア、東欧からの輸入超過をもたらしめた。一方、その工業製品の輸出によつて、西ヨーロッパ諸国に大きな出超を生み出した。ドイツは後者によつて前者をカバーして、多角的決済網の一環となつた。⁽⁸⁾ ドイツはその農産物輸入国に対しては工業製品を輸出するという形で工業国として対し、西ヨーロッパ工業国に対してもある程度重化学工業的な特化を行つていたが、農産物輸出国に対しロシア・東欧、近隣の小国を除いては特別な関係に立つものではなかつた。オランダからのバター、デンマークからの肉類は、前掲第二九表

でみたように、それぞれの品目の輸入に大きな位置を占めていたが、量自体がイギリスに比べて少なかったことは前述した通りである。

ドイツはイギリスと違ってその経済的重心を、常に世界ではなくヨーロッパにおいていた。フランスもまた同様である。⁽⁹⁾ 第五七表にみるように、ドイツの輸出は西ヨーロッパが半分以上を占め、東ヨーロッパと合わせると七五%にも達していた。この点イギリスの三三%を大きく引き離していた。ことに東ヨーロッパの比重の差が大きかった。輸入については西ヨーロッパについては、三二%で輸出より低く、イギリスの三六%をも下回っていたが、東ヨーロッパについては二二%と他国を大きく引き離していた。ドイツのヨーロッパ以外との貿易は、輸入についてはカナダ、オーストラリア・ニュージーランドを別として、イギリスと大差ない関係を保っているが、輸出についてはアメリカ、南米を除いてイギリスより弱い関係にあった。

このようなドイツ貿易の特色は、一九世紀末からのものであった。一八八九年にはヨーロッパへの輸出依存度は七七%、輸入依存度は七九%であった。一九〇二年にはそれぞれ七八%、六二%であった。輸入依存度はイギリス、ベルギー、オランダにおいて顕著に下がっており、アメリカ、中南米、アジアにおいて上がっているが、これは恐らくアメリカ、中南米、アジアの物産のイギリス、ベルギー、オランダ経由の輸入が、直接輸入に代わったこと、さらには工業原料、食糧輸入の増加によるものと思われる。輸出においてはイギリス、アメリカが下がり、ロシア、フランス、アジアが増加した。⁽¹⁰⁾

ロシア・東欧との関係のドイツにとっての重要性はすでにしばしば指摘した。ロシア・東欧はドイツへの穀物供給地域であった。輸出市場としての地位も高かった。しかし両者の関係は、ロシア・東欧側から見た場合の方が強

第57表 主要工業国の貿易相手国別比率 (1913年)

(単位: %)

主要工業国 貿易相手国	イギリス		ドイツ		フランス		アメリカ	
	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出
西ヨーロッパ計	35.9	27.6	31.7	52.7	43.4	64.7	44.8	58.1
イギリス	-	-	8.1	14.2	13.2	21.1	15.2	23.8
ドイツ	11.6	7.7	-	-	12.7	12.6	10.3	14.2
フランス	6.2	5.5	5.4	7.8	-	-	7.7	6.2
オランダ	3.5	2.9	3.1	6.9	1.4	1.2	0.7	4.9
ベルギー	3.4	2.5	3.2	5.5	6.6	16.1	2.3	2.6
東ヨーロッパ計	7.5	5.3	22.0	21.8	8.1	2.4	2.5	2.0
オーストリー・ハンガリー	1.1	0.9	7.7	10.9	1.2	0.6	1.1	0.9
ルーマニア	0.3	0.4	1.5	1.4	1.1	0.1	-	0.1
ロシア	5.8	3.4	13.2	8.7	5.4	1.2	1.2	1.0
アメリカ	19.8	5.6	15.9	7.1	10.6	6.1	-	-
カナダ	4.5	4.5	0.6	0.6	0.2	0.4	7.9	16.2
南米計	8.3	8.7	9.3	6.2	8.8	5.2	9.3	5.1
アルゼンチン	6.2	4.3	4.6	2.6	4.4	2.9	1.4	2.2
ブラジル	0.7	2.4	2.3	2.0	2.1	1.3	5.6	1.6
アフリカ	3.4	6.1	1.7	0.9	1.5	0.9	1.2	0.7
インド	5.5	13.4	5.0	1.5	4.6	0.7	3.9	0.4
中国	0.4	2.8	1.2	1.2	2.8	0.3	2.2	1.0
日本	0.6	2.8	0.4	1.2	1.5	0.2	5.5	2.5
オーストラリア・ニュージーランド	6.5	8.7	2.9	1.0	3.4	0.2	0.9	2.1
その他	7.6	14.5	9.3	5.8	15.1	18.9	21.8	11.9

注. 西ヨーロッパには表記の国以外にデンマーク, スペイン, フィンランド, イタリー, ノールウェイ, スウェーデン, スイス・東ヨーロッパは同じくブルガリア, ギリシアを含む. アフリカはエジプト, 南アフリカの計, 南米は表記2カ国以外にチリー, ウルグアイを含む.

出所は League of Nations. *Memorandum*... (op. cit.), Vol. I, pp. 220-259.

かった。第五六表にみるように、オーストリー・ハンガリー、ロシア、ルーマニアのドイツへの貿易依存度は目立って高かった（もつともルーマニアの輸出依存は少ない）。とくに輸入依存度の高さは、これらの国々がドイツ工業製品の殆ど独占的な市場であることを示している。このドイツ・ロシア・東欧関係は、後者の前者への依存関係であり、イギリス体制におけるイギリスと農薬国との関係を類似していた。また第一次大戦前におけるイギリスと植民地との関係に類似していた。

ドイツはしかしこのような関係を、特に一八九〇年代以降に強化した。それは「自由貿易」によるものでも、植民地に対する支配力によるものでもなく、資本の輸出と貿易政策によるものであった。ドイツの資本輸出はイギリスに比べれば少なく、一九一四年に累積投資額でイギリスの三九％にすぎなかった。⁽¹¹⁾ その投資先はオーストリー・ハンガリーを主とする東ヨーロッパであった。ロシアに対してはフランスの資本が大きな役割を演じたが、ドイツ・フランスの資本はロシア・東欧において、イギリスの資本が新開国で演じたと同じ役割を演じたのである。⁽¹²⁾

ドイツのロシア・東欧との通商関係の強化に通商条約が大きな役割を果たした。別に明らかにするように、一八七〇年代以降、世界経済は自由貿易時代から保護関税時代へと突入するが、関税協定はこの時代の貿易戦の有力な武器であった。ドイツは一八九一年にオーストリー・ハンガリー、イタリア、ベルギー、スイスと（いわゆる大通商条約）、一八九三年にルーマニア、セルビア、スペインと（いわゆる小通商条約）を、一八九四年にはロシアと通商条約を結んだが、それはドイツ側の農産物関税の引下げに対応して、相手国側がドイツ工業製品に対する輸入関税を引き下げること内容としたものであった。⁽¹³⁾ これによってこれらの国々、とくにロシア、東欧をドイツ工業の優先的な市場として確保しようとしたのである。その見返りとしてドイツはロシア、東欧の農産物に国内市場を優

先的に開放した。一八九〇年代以降に強化される対ロシア・東欧からの農産物輸入の絆は、このような一種の特恵的関税ブロックの形成の一つの結果であった。

フランスはイギリス、ドイツよりもずっと深く西ヨーロッパとの貿易に重心を置いていた（第五七表）。フランスは一九一三年に輸出の六五％、輸入の四三％を西ヨーロッパとの間で行っており、東ヨーロッパとの関係は小さかった。国別にはイギリス、ドイツ、ベルギー、アメリカが多かった。フランスはアルジェリア、チュニス等の植民地との関係が比較的大きかったが、一般には分散した貿易関係を示し、農産物輸入の特色と一致していた。

アメリカの貿易も西ヨーロッパ中心であった。ヨーロッパとの関係は一八七〇年代に比べれば、輸出についてはかなり低下し（八〇％台から六〇％）、輸入については殆ど変わらなかった。⁽¹⁴⁾ 国別にはイギリス、ドイツ、カナダとの関係が深く、第五七表ではその他のなかに含まれているキューバ、メキシコの中米諸国も小国の割には目立っていた。相手国の側からみた場合（第五六表）、輸入の六四％、輸出の三八％をアメリカに依存するカナダと、輸入の六四％と輸出の三三％をアメリカに依存するブラジルが目立つが、キューバ、メキシコも恐らくこれ以上の対アメリカ依存を示していたであろう。つまりアメリカはアメリカにとってよりも、相手国にとって大きな意味を持つ経済関係を、アメリカ大陸内に作っていたのである。そしてこれらの国から農産物（キューバの砂糖、ブラジルのコーヒー等）を輸入し、工業製品と一部の農産物を輸出していた。アメリカはハワイ、プエルトリコ、キューバ、フィリピンの砂糖に対し特恵関税を附与していた。⁽¹⁵⁾

またアメリカはアジア諸国との貿易に重要な意味を置いていた。一つは日本であり、ヨーロッパ諸国以上に強い関係があった。日本にとっても対アメリカ依存は、ことに輸出において強かった。これはいうまでもなく生糸貿易

によるものである。もう一つはイギリス領インド、イギリス領マレー、オランダ領東インド等の熱帯諸国であった。これらの国々からアメリカは、前述したように熱帯産食糧・原料を輸入していた。その他アメリカはアルゼンチン、オーストラリア、ニュージーランドに対する工業製品の輸出国であった。

これらアメリカ大陸、アジア、オセアニアとの関係は、アメリカを工業国とし相手国を農業国とする関係であった。しかしこの関係は個々の国々との間で個別的に決済されるものであるよりも、全体としてバランスされる性格のものであった。つまり熱帯諸国、日本に対してアメリカは農産物輸入によって大きな入超を持ち、温帯の新開植民地に対しては工業製品輸出によって大きな出超を持っていたのである。アメリカは前者との入超を、後者との出超によってまかなった。これがまた多角的貿易体制におけるアメリカの主要な役割であった。⁽¹⁶⁾

本章最初に述べたように、帝国主義的世界経済は複数の工業国と植民地体制によって織りなされていた。それはこれまで見たように、多数の工業国と多数の農業国とが相互に関係し合う形態でもあったのである。そしてこれは全体として多角的貿易のネット・ワークの一環を構成していた。これはたしかにイギリス体制の解体ではあったが、ドイツ・ロシア・東欧関係、アメリカ・アメリカ大陸諸国関係のような工業国―農業国関係を、つまりは小イギリス体制をそれぞれにつくり出すことでもあったのである。帝国主義段階を特徴づける植民地体制自体、新しい形態のイギリス体制ということも出来た。平和的自由貿易による国際分業というイメージでイギリス体制をとらえると、帝国主義的植民地体制はそれとそぐわないが、イギリス体制の半面はインド、アイルランドについて明らかなように、そもそも植民地への「帝国主義」的な搾取の上に築かれていたからである。帝国主義とは植民地獲得競争に代表されるように、それぞれの工業国⇨帝国主義国が、自らを中心とする小イギリス体制を作り上げようという運動

の表現であつた。

農産物貿易はこの運動の目的として、また結果として發展した。勿論、農産物輸出のすべてが植民地・従属国から行われたのではない。アメリカのように一九世紀末には、もはや政治的には勿論、資本輸入の面でもヨーロッパの支配から脱した、自ら帝国主義國となつた農産物輸出國もあつたし、ドイツのように一部の農産物輸出を残している場合もあつた。またアルゼンチン、ロシア、ルーマニアの場合は、経済的な關係はともかくとして、農産物輸出自体はかなり広く分散した輸出先を持っていた。つまり農産物輸出自体の發展が、特定の國への從属を意味していたわけではなかつた。

この運動の主体はいうまでもなく資本であるが、その意味ではこれらの農産物輸出はいずれも資本の運動の結果であつた。資本輸出の果たした役割については既にしばしば述べたが、商品輸出もまた農産物輸出を引き出す力として作用した。農業國の場合、工業製品の入對する支払い、農産物の輸出によるしかない。農産物の輸出先がどこであろうとその点は問題ない。多角的貿易とはそのようなことを意味している。イギリスの綿製品の出對がインド綿工業を破壊し、インドをして綿花輸出國たらしめたとは違つた仕方、資本の運動はロシア、東歐の穀物をヨーロッパ市場へと引き出した。

ロシアの穀物輸出は一八六一年の農奴解放を契機として増加し始めた。解放は生産を増加させると共に、きびしい債務を農民に課した。その上増大する間接税の負担が加わつた。このため農民はますます現金を必要とするようになり、生産物を販売することを強いられた。ロシアの狭い国内市場は、その生産物を吸収しきれず、多くの生産物はその販売先を輸出に求めざるをえなかつた。しかも価格が下落すればする程、一定の所得を維持するために、

第 58 表 小麦 1 人当たり消費量の推移 (単位：ブッシェル)

	1885~1889 平 均	1889~1894 平 均	1894~1899 平 均	1899~1904 平 均	1904~1909 平 均	1909~1914 平 均
アルゼンチン	4.75	4.79	4.92	5.27	5.09	5.37
オーストラリア	5.18	5.16	5.16	5.21	5.15	5.23
カナダ	5.14	5.12	5.12	5.17	5.11	5.19
アメリカ	5.34	5.35	5.35	5.41	5.21	4.96
ブルガリア	3.50	4.75	3.20	3.75	2.65	4.14
ハンガリー	3.90	4.05	4.55	4.02	4.17	4.47
ルーマニア	3.05	2.40	1.55	3.16	4.09	2.18
ユーゴスラビア	1.30	2.00	2.35	1.80	1.68	1.79
ヨーロッパ輸入国平均	4.31	4.36	4.53	4.65	4.50	4.68

注. ヨーロッパ輸入国は16カ国である. W. Malenbaum, *The World Wheat Economy 1885-1939*, 1953, pp. 244-245.

より以上を輸出しなければならぬために、八〇年代から九〇年代初期にかけて、小麦の輸出の増加は生産の増加を上回った。輸出率が最高の六一％に達したのは、一八九一、二二年の大飢饉の直前であつた。⁽¹⁷⁾ ロシアの穀物輸出の増大はこのような窮迫販売、飢餓輸出を意味していた。

ロシアばかりではなかった。第五八表にみるように、一人当たり小麦消費量を比較してみると、新開輸出国の場合、一人当たり消費量は三つのグループのうち最も高く、しかもほぼ一貫して増加している。またヨーロッパの輸入国でも同じくほぼ一貫した増加が見られ、しかも両者共に消費量は安定している。これに対し東欧諸国は消費量の水準が低く、しかも年々不安定であり、ルーマニアの如きは八〇年代後半から一九世紀末まで著しく減少しているのである。このことは輸入する側が必要量を輸入しているのに、輸出する東欧側が豊凶によって著しい消費量の変動が起こり、しばしば飢餓輸出に追い込まれていることを示すといつてよいであらう。同じ輸出国でも新開国の場合は飢餓輸出は起こっていないのである。おくれたロシア、東欧

の小農經濟が、急速に貨幣經濟に資本の運動にまき込まれた結果であった。

インドの小麦、米輸出もまた飢餓輸出の例であった。インドを襲った再三の飢饉をこえて穀物輸出は続けられた。インド農民に課せられた過大な地租の納入のために、一八九七・九八年のような凶作の年でさえ農民は過大な食糧を販売すべく強いられた。翌年の作柄は良かったが、滞納された地租の納入や凶作の痛手の回復のために、農民はさらに多くの食糧を販売せねばならなかった。⁽¹⁸⁾

植民地体制はしばしば極端な特化を植民地經濟に強いた。いわゆるモノカルチャー經濟がそれであるが、それはしばしば三角的な農産物貿易の發展をもたらした。米の輸入国グループの一つにそのような植民地があった。たとえばジャワは砂糖を中国、インドに輸出し、高品質米の輸出国でもあったが、オランダ領東インドは日本に次ぐ米の輸入国であった。セイロンは初めにコーヒー、後に茶のプランテーションの發展と共に米の輸入国になった。フィリピンもアメリカの統治の下で、ココナッツと砂糖生産を急速に拡張し、一方では米の輸出国から輸入国へと転落した。マレーはゴムと錫の發展のために、中国と南インドからの大量の移民を受け入れて、米の輸入依存度が最大の国となった。英領インド（ビルマ）からの白米の輸入と再輸出は、イギリスの重要な貿易であったが、その白米はキューバを含む西インド諸島のモノカルチャー經濟の食糧となったのである。⁽¹⁹⁾モノカルチャー的特化は、多角的貿易を必然化するものでもあったのである。

注(1) この記述の出所は第五二表に同じ、以下の記述も同様。

(2) S. B. Saul, *op. cit.*, pp. 27-28. 邦訳、前出、三一頁。

(3) 数字の出所は *Statistical Abstract of the U. K.* (*op. cit.*) であり、筆者計算。

(4) S. B. Saul, *op. cit.*, pp. 197-198. 邦訳、前出、二三四～二三七頁。

- (5) A. H. Imlah, *Economic Elements in the Pax Britannica, Studies in British Foreign Trade in the Nineteenth Century*, 1958, pp. 70-75.
- (6) League of Nations, *The Netuook of World Trade*, 1942, p. 48. F. Hilgerdt, "The Case for Multilateral Trade", *The American Economic Review*, Vol. XXXIII, No. 1, Supplement Part 2, Mar. 1943, p. 398.
- (7) 「一九一三年には多角的貿易の全体の複雑なネットワークはイギリスの周りに集中していた。イギリスはなお最大の貿易国であり、その通貨は世界のもっとも重要な交換手段であった。世界各国はロンドンに保持するポンド残高の変動により、相互に貿易勘定を決済するようになった」(W. Woodruff, *op. cit.*, pp. 672-673)。
- (8) League of Nations, *op. cit.*, p. 686.
- (9) W. Woodruff, *op. cit.*, p. 686.
- (10) 藤村幸雄「金融資本成立期におけるイン貿易構造の特質」(『同志社大学経済学論叢』第一三巻第二号、六六～六七頁)。
- (11) A. G. Kenwood and A. L. Lougheed, *The Growth of the International Economy 1820-1960*, 1973, p. 41. 岡村他邦訳『国際経済の成長一八二〇～一九六〇』二〇頁。
- (12) R. M. Stern, *op. cit.*, p. 46.
- (13) 藤村、前出、六一～六二頁。
- (14) U. S. D. C., *Statistical Abstract of the U. S.*, 1929, pp. 473-475.
- (15) L. B. Bacon & F. C. Schloemer, *op. cit.*, p. 114.
- (16) A. G. Kenwood and A. L. Lougheed, *op. cit.*, pp. 109-110. 邦訳、前出、八六頁。League of Nations, *op. cit.*, pp. 85-87. F. Hilgerdt, *op. cit.*, pp. 399-400.
- (17) M. E. Falkus, *op. cit.*, pp. 419-421. なおロンドン農民の窮迫は大飢饉の時と限らなかった。一八九九年の窮状について W. Crooks, *The Wheat Problem*, 3rd ed., 1917, pp. 17-19 に引用されている。The *Globe*, 26 th May 1899 の「テナムブナム川の干涸と飢饉」。
- (18) R. Dutt, *The Economic History of India, in the Victorian Age*, 1904, (Reprinted: 1970), p. 534.
- (19) L. B. Bacon & F. C. Schloemer, *op. cit.*, pp. 81, 85.

六 おわりに

交通革命と農産物市場の拡大の過程は、同時に農業大不況の過程であつた。新開国や農業国の安いコストの農産物が、西ヨーロッパ諸国に安い運賃で輸入されることによって、西ヨーロッパ農業は深刻な不況、危機に陥つた。そしてこの農業大不況を通じて、各国農業の調整が進み、世界農業は新しい条件の下に再編成された。

いままで扱ってきた世界農産物市場の形成とは、一面からいえば世界農業のかかる再編成の過程であつた。しかしこうした側面、ことに西ヨーロッパ農業の再編と、それに伴う農業保護関税政策の展開といった、いわば競争的な面についてはここでは全く捨象し、もっぱら貿易のもつ相互依存的な面のみをここでは扱つたのである。競争的な側面は別の機会にゆずることにしたい。